

# 女教師

# 肉弾

# レスリング

# 死闘メガネっ娘

特別収録：@パラレルワールド  
二人ともメガネをしてない世界  
片方だけがメガネをしている世界  
全4試合収録

<プライベート・シークレットレスリング>  
メガネっ娘対決 きらら vs さおり  
ノールール・ドミネーションマッチ p 3

<パラレルワールド編>  
@ふたりともメガネをしていない世界  
御前試合 オンリー・ギブアップ・マッチ p 66

@きららがメガネっ娘の世界  
幼馴染み パンツはぎ決闘デスマッチ p 114

@さおりがメガネっ娘の世界  
地下闘技場 女教師失禁デスマッチ p 162

#### 惑星アマゾン

幾つかの王国が存在する平和な世界である。

女性型生命体だけが生息し、独自の文明が築き上げられていた。王家・王族や貴族が庶民のために繰り広げるレスリングは、娯楽と同時に、見るものに医療効果をもたらしたり、活力、活気を与えるものだった。レスリングは当然、王族や貴族達のものではなかった。大衆、庶民、誰もがたしなみ、公的に、或いは私的に、日々さまざまな形でのレスリング大会やプライベートなレスリングが行われていた。



## メガネっ娘対決



きらら。理系教師。96-58-99 162cm 56kg  
「この、自慢の太ももの間に挟み込んで、気がすむまで締め上げたいんです。そのかわり…ウケにも自信あります」。



さおり。文系教師。94-62-96 158cm 61kg  
「思う存分、抱きしめる脚いがしたいの。Mでなくて、ありあまるスタミナと、折れない心を持った方と。対価は、あたしのハガネのボディーでいかが?」。

アマゾンでは無数の試合形式やルールがある一方、完全に誰にも知られない「秘密の試合」も数多く行われていた。

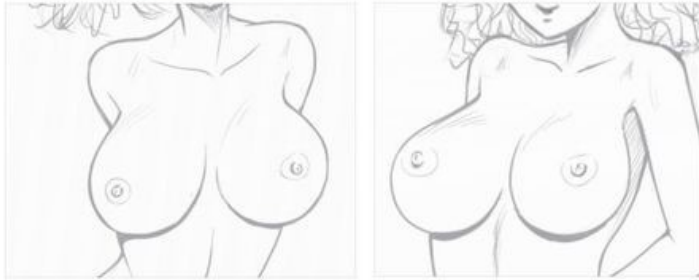
「秘密の試合」の中のひとつに、性欲処理、ストレス処理を含めさまざまな「ちょっと隠れてやりたい」娘達のニーズに応えるシークレットシステムがあった。申請者の性格、リビドー、体格、腕力、体力、スキルに応じて対等・最適の相手が用意され、しかもそこでは本来、「庶民は着衣で格闘する」という伝統に縛られず、本人達が望めば王族と同じスタイルでの決闘・試合が可能だった。

その日、そのシステムを利用したのはふたりの若き女教師。

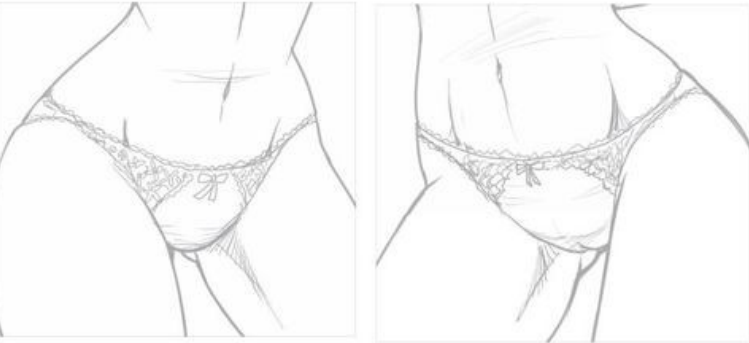
本気で存分にやりたいふたりに、念願の時が訪れていた。どちらも23才。メガネっコと言うにはどちらかという「メガネ美人」のふたり。理知的で、どこか頼もしい気配をまとったふたりがパンツ一枚の姿で、まるで日光浴でもするような涼しい表情で向かい合っていた。



ずっと「力と力」をぶつけ合う肉弾戦をやらかした。しかし立场上、通常は普通のレスリングに合わせていた。地を出すと通常の試合やイベントではあまり歓迎されないのは、子どもの頃からの経験でわかってた。「一度相手をとらえたら、相手が首を上げるまで離さない」そんな闘いのスタイルはあまりに地味で、相手にも、ギャラリーにも歓迎されないのだ。教師の仕事、副業のモデルの仕事…そして、闘いでもやりたいようにやるわけに行かない不満をつららせていたふたり。  
今、念願の「自分のやりたいスタイルで存分に肌を合わせられる相手との手合わせ」の時が訪れた。



初対面。一目で、「相手が自分と互角か、もしかしたらそれ以上かも…」  
ふたりは、相手のたわやかな乳房や、引き締まったウエストをなめ回すように見つめ合う。「そられる」容姿、顔立ち、肉體…乳房や、股間がうすいてくる。普段の試合だったら、当然抑える衝動。むしろ、普通だったらあり得ない肉の欲望の香りが、相手からもぶんぶんしている。組み敷きたくなる相手。それは、同時に「組み敷かれたい」と思える相手。互いに磁石が引き合うように、ふたりの距離が近づいていく。リミッターをはずした闘いがどんなものになるかわからない。ふたりは特に勝敗や決着についての取り決めも忘れ、お茶でもするよう互いの肌を寄せ合った。もはや試合とは置えないそれは、ノールール・ドミネーションの幕開きだった。



# ノー・ルール ドミネーション・マッチ

「うく…う…！」  
何気ないヘッドロックだった。  
しかし、どうしてもふりほけない。  
普通の試合なら長くても1分後のこのワザ。  
しかし、さおりは全くワザを解く気がなかった。  
こらえきれぬように、さららがうめき声を上げる。

まだ半分、もう少し、出力を上げるわね  
逃れようと苦しげに身をよじり、もがきさららの  
頭を抱え、さらにぎゅっと締め上げる  
「…！」  
言葉にならない怒濤を上げるさらら。



気を失いそうになると、ふっと力を  
ゆるめ、ほっとするタイミングに合  
わせてさらに締め上げる。  
苦しげにもがく相手の肉体の動きを  
ねじ伏せるように絞り上げると、相  
手の口から小さなうめき声漏れる。



ギブも、失神も関係ない。  
相手が立ち上がってくる限り、  
永遠に終わらない…！  
それだけがただひとつのルール。  
さおりは、今思う存分相手を締め  
上げる快感に酔っていた。  
これこそ、望んでいたもの…！  
闘いの駆け引きも、計算もいら  
ない。  
ただ、心の赴くままにこうやっ  
て…！  
「ふああ…！」  
あなたは、獲物よ…！  
苦しげな相手の怒濤と、苦悶の  
うめき声から地よい。





「あう あう あう〜」  
ぎゅっと抱きしめ、上下にユサユサと揺さぶってやる。  
いつまでもこうしていきたい…  
自らの思いを抑えきれないように、相手のカラダを抱きしめたままずんずんとお腹を前後に突き出すように動かさずさおり。  
〈ああ、ギブ、ギブです〉  
普段の試合とかなら、殆どの相手がもう、そうやって負けを認める頃だった。  
でも、さらさらはその声は上がらない。  
むろん、さおりもまだぜんぜんやめるつもりはなかった。



レスリング友達がいなくていいじゃない。  
ベアハッグが得意な相手とも闘ったことがある。でも、この相手は…この口の肌…まるで火のように熱くて、カタイ…。まるで、あたしのカラダに相手の胴体が食い込んで来るとい



息を吐きながら揺さぶり、息を吸いながら絞り上げる。  
「うざあ〜」  
胴体がミシミシと鈍い音を上げ、相手の頬が絞り出すような悲鳴を上げる。  
ああ、楽しい！  
これこそ、ずっと夢見ていたものだった。



「あ——！」  
さおりの悲鳴が上がる。  
激しく乳房を揺さぶりながら、きららの口もと  
が微笑みを浮かべた。

「あー！ あぐッ あうー！」  
首を振り、大きな乳房を揺らせて悶えるさおり。  
「私、タフだって言いましたよね」と、きらら。  
正面からのベアハッグからの、ボディシザーズでの切り返し。  
まるで全くダメージを受けていないみたいに、しかし頬を紅潮させ  
て、きららは相手の胴体を締め上げていた。





うっく… 確かに強烈だけど…



なまいき! 振りほどくつもり?



「うああ!」



相手の胴体に巻きつけた両脚に力を入れるたびに、相手の女が泣き叫ぶ。この体勢に入って、もうかなりの時間がたっていたが、きららの締めつけはいっこうにゆるむ気配はなかった。さすがねえ。普通の相手じゃ、もうとっくにギブアップしてるのに… きららの目じりにも涙が浮かぶ。序盤から、涙が出てくるほどの全力で相手の肉体を締め上げられるなんて…! 舌なめずりをすると、さらに腰を上下に振って責め立てるきらら。

「はろう あお! アオッ あお〜〜」  
あのさおりが、なすすべもなくケモノのように泣き叫ぶ。  
もし彼女の普段の馴れを知るものが見たら、思わず欲情するような痴態をさらし、きららのはさみ締めで蹂躙されるさおり先生。

「あひい ひあー！」さおり先生の「怒鳴」が響く。  
休むことなく、そのまま体勢を横にひねって責め立てるきらら。  
「対価はハガネのボディー？ 確かに、とても締め甲斐があります！」  
軽く息をきらせて、きららは身をのけぞらせて締めつける。



「ひ… あうー！ ああ、ああ！」  
ふりほどけないボディシザーズ、そして、ぜんぜん休まないで締め続けるスタミナ…  
こんな相手がいたなんて…！  
苦しい、痛い…！ 涙で顔をくしゃくしゃにし、その口からはアワがあふれ出していた。  
<しめおとされちゃう…> 気を失いそうになりながらもさおりは必死にこらえていた。



すごいわ！ あたしの太ももにこれだけ長い時間挟まれて、まだ失神しないなんて！  
ウン、ウン、とカラダをふるわせては力を込める。  
まだまだ序盤だから、このくらいにしておこうかな…



すごい胸締めをありがとう。満足した？  
胸締めには、あたしも胸締めよ...♡  
「あう————！」  
まるでダメージが残らないみたいに、ワザを解か  
れたらすぐさま反撃するさおり。  
激痛に涙を流し、きらの悲鳴が上がる。





あひ… か… くひイ



せっかくだから、こんなシンプルなワザもどうかしら？

「あう…ああ～ ああ、アア…！」  
ふりほどけず、だんだんさららの悲鳴が泣き声を帯びてくる。  
相手の背中に密着させた乳房が少し熱く、硬くなってきた。  
「んん..」  
決めたまま、少し左右に揺さぶってやると、さららの自由な乳房が重そうに左右に揺れる。  
「やっぱり、タフよねあなた。普通の相手なら、もうとっくに落ちちゃってるわ。」  
「うう～（涙声）」  
「安心して。こんなワザで失神なんてさせないから（くい）」  
「ひい～」  
ふたりにその自覚はなかったが、この間いは文字通り、拷問ごっこだった。



さおりさん！ あたしも、こういうワザ知ってるんです。  
脚で羽交い締めと、どっちがよかったかしら？  
「あ あ あ」  
さおりの胸体が苦しげにのたうつ。  
腕は、抜けない程度にがっちりキープしておいて、本命は当然こっち…  
弾むようにして、相手の腕と顔を挟み込んだ脚を絞り上げる。  
「きゃあ！ あ、あさあ！」  
「さおりセンセ、可愛いですよ！」  
きらら先生の調教のお時間だった。



「あざい ああ！」 苦しげに、そしてみっともなく股を開き、脚をばたつかせてあはれるさおり先生。



あは、こんなもんなかな♪  
思う存分締め上げ、苦しみがく相手をなぐる  
きらら。レフェリーブレイクも入らない。もうちょっと… 「うああ～ あう～ ああ～（泣）」  
さおりが上げる泣き声をさらにしばらく楽しんでから、きららはゆっくりワザをはずした。



ワザから「解き放たれる」と同時に、  
相手をとらえるさおり。  
あり得ない動きだった。



ず…スリーパー…！  
まったく身動きができない。ほどなくして、きらら  
の口もとにアワがあふれ出す。



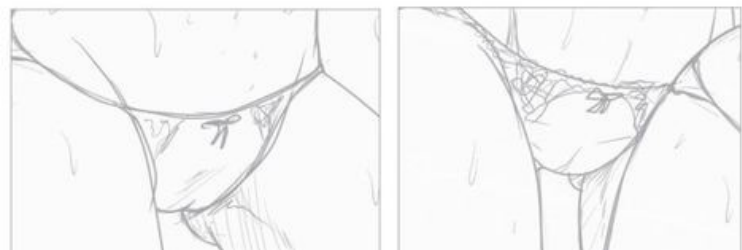
「だめじゃない 結構効いたわ。きらら  
センスの三角締め。腕に力はいんな  
ーい？」  
「ああ ああ ああ」  
かわいい声の近いうめき声が聞こえる。  
「まだまだ、いけますよお！」  
ハガネのボディ、タフが売り  
どちらの電池が先に切れるか…  
後先考えない全力勝負だった。



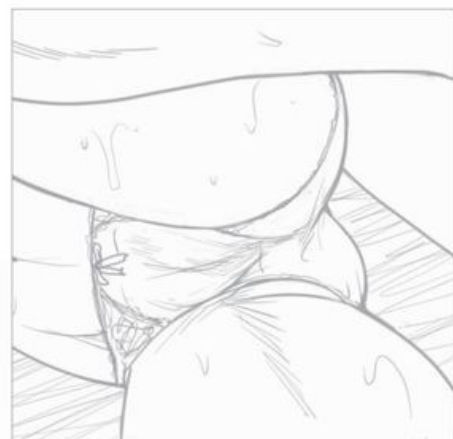
「ぎゃああ～ あ～！」  
きらの絶叫が響いた。



「さ、もっと泣いて！」



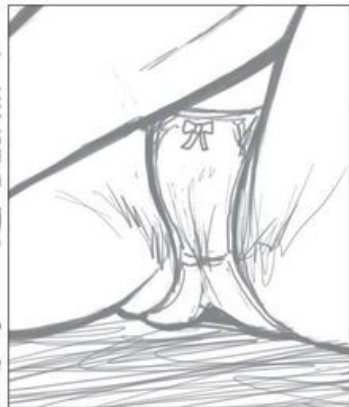
「ああ、あ～～～！」「おっばいは元気そうよ！がんばって！」  
しほりあげ、そして左に、右にゆさぶりやひねりをくわるさおり。後ろからでもきらの乳房が激しく弾み、揺れるのがわかる。  
思う存分…！ まだまだ、さおりは満足していなかった。



「うう〜…」 きららが胸を食い縛る。



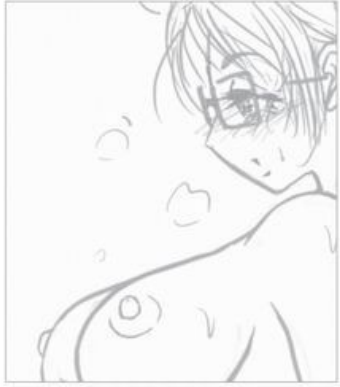
「うああ うがあ〜」  
「ふりほどける？ ふりほどいて！」  
さおりはがっぴりときららを抱きかかえて、うながすように揺さぶっていた。  
ふりほどけな〜い！  
たみかけられるまま蹂躪され、きららはまた泣かされていた。  
悔しい…  
そのきららの苦悶の表情を見ながら、さおりは思う存分やれる幸福感を体中に感じていた。  
互いに捨て身を相手を責める女教師同士。  
どんなに泣いても、動けなくなっても、してあげる…！。  
一心不乱に相手をなぶるさおり。



「きゃあ〜！」  
おっぱいを激しく波打たせて、さおりが悲鳴を上げる。  
「先生、楽しんだ？ 楽しかった？  
今度は、私の番ですよ」  
きわめてオーソドックスな、普通のボディシヤーズだ。  
しかし、まるで鋼鉄のハサミにとらえられているように、  
さおりはまったく振りほどくことができなかった。



「さおりせんせ、ぎぶあっぶ？」 きららがいじわるく問いかける。  
「んあ うああ ノー！」 思わず叫ぶさおり。  
「んぶ♡」 ざりざり ざり  
「くああ〜〜！」  
カラダの底からしごきあげられるように、絞り出される悲鳴を上げ、  
泣き叫ぶさおり。  
このコ…すこ…い…  
泣き叫びながら、さおりはあらためて相手の、きららに敬意と愛情  
に近い思いを抱いていた。

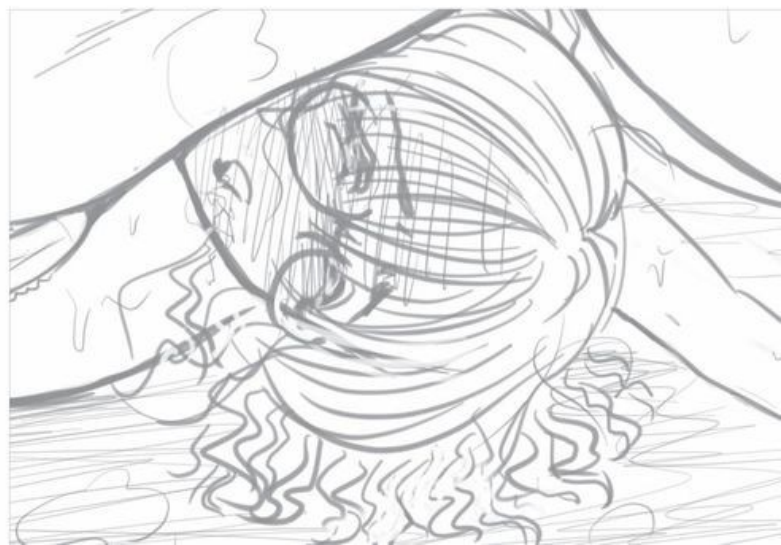
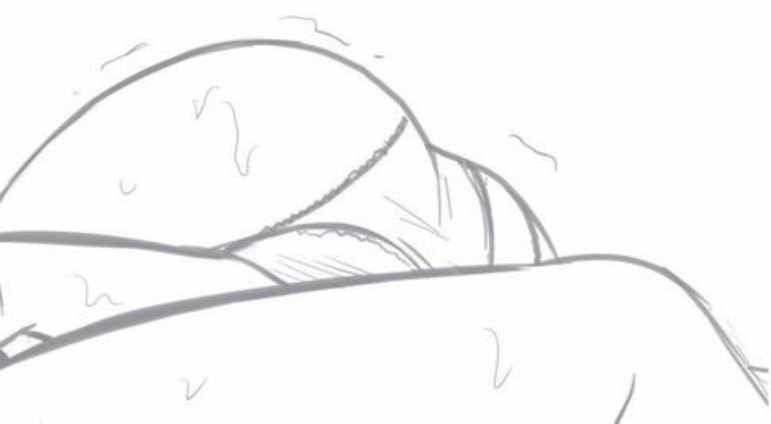
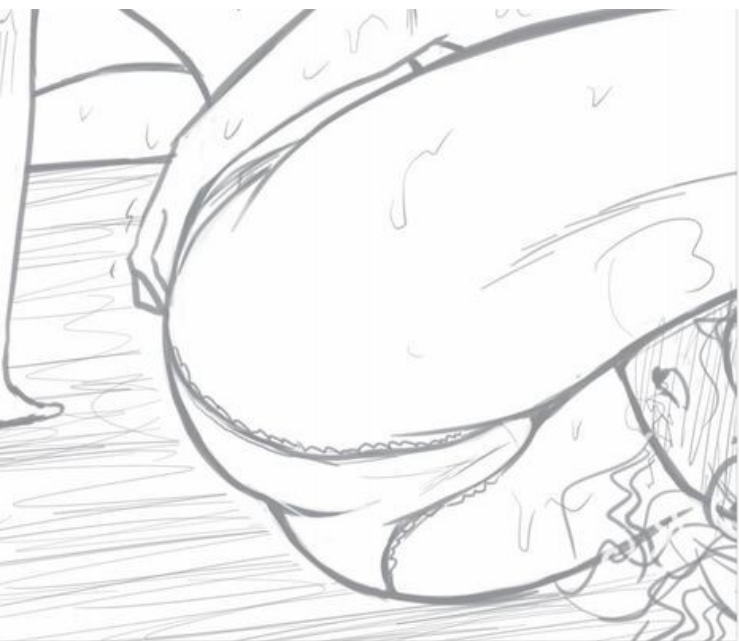


「グロッキーですか？ まだ早いですよ」  
 正面からのヘッドシヤースに持ち込んで、余裕のきらら。  
 ロもとに笑みは浮かべているが、その脚は凶悪なまでの  
 力で、きららの頭を締めつけていた。

.....♡

あ... うう...







「やっぱり、さすがのさおりちゃんも落ちちゃったか…」  
太ももの間から、小刻みに振動が伝わってくる。  
「失神、ケイレン…かあ（くず）  
まあ、あたしの太ももにこんだけ長い間締めつけられたら、無理もないですね♡」

握り起こすように、なおもぎっしりと締めながら、  
揺さぶるきらら。  
「早く起きて下さい、私、まだ全然やれますよ。」  
満足していないわけではない。ただ、全力を振り絞れる  
相手との時を、まだまだ楽しみたい  
お互いに、自分のカラダが担保。  
きらは、片手を振り上げると突き出されたさおりのお  
尻を思いっきりひっばいた。



起こしてくれてありがと。こんどは、あなたがお休みなさい!



さおりの、白く、たくましい太ももがピクピクとケイレンしていた。



「締め落とすつもりでやったら、簡単なよ。ほら…」  
さおりは、相手の太ももの間で気を失ったのが怖しかった。  
まして、お尻を叩かれて目を覚ますなんて…!  
目を覚ますや否や、きららの後ろにまわり込んで仕掛けたスリーパーホールド。  
チョコスリーパー気味のそれは、あっけなくきららを眼に落とした。

「こんなつもりじゃなかったんだけど…  
きららさん、仕切り直しましょう!」

さおりは、スリーパーを解くと  
優しくきららを握り起こした。





<どう?この体勢。これなら、お互いに顔が見れるし、お互いの得意技で真っ向から…>  
 <ふふ…やれるわね>  
 言葉を交わすことなく、さおりが相手の胴体に腕を回して抱きかかえると、きらはそれに応えるようにさおりの胴体に脚を絡めた。

「覚悟…じゃないけど、言いたいな。覚悟はいい?」とさおり。「じゃあわたしも…お覚悟は、よろしくて?」

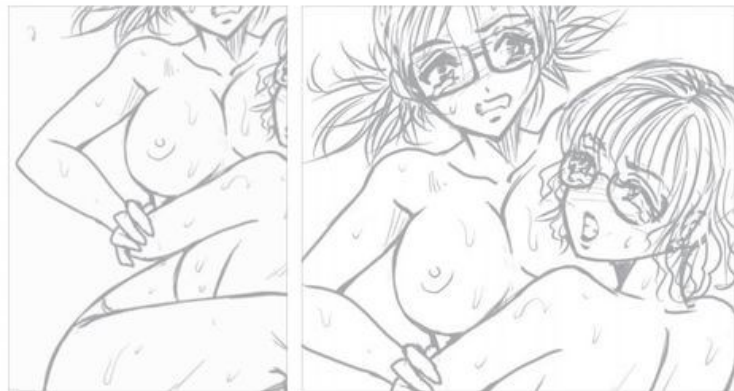
にこやかに、和やかな会話をかさねながらも、お互いに少しずつその腕に、脚に、力をこめていく。  
 <こらえきれかな>  
 <耐えられるかしら>

お互い、十分味わい尽くした相手のパワ。ただの腕力や、脚力ではなく、身体芯から沸き起り、振り絞ってくるその力。

<勝負… 雌雄を決する… いろんな言葉が頭をよぎるけど、…この肉体よ!>

いつの間にか、ふたりは相手の肉体が大好きになっていた。

<受け止めて! 受け入れて!>  
 密着させた肌と肌が、さらに強く押しつけ合わされた。



「あう! あうう~!!」  
 先に悲鳴上げたのはきらだった。  
 のけぞり、苦しげにうめく彼女を、さおりは冷静に締め上げ、そして、上下にゆさぶってやる。

「どうしたの? こんなものじゃないでしょ?」  
 期待はずれだったかな? でも、それならそれで、こんどは問答無用で締め落としてあげる!

みしみし

「うああ~!」  
 悲痛、という言葉がふさわしい、哀れな悲鳴を上げるきらら。頭を振り、身をよじる。  
 しかし、悶え苦しみながらも、さおりをくわえ込んだ脚は軌跡に相手の胴体を締めつけ、しぼりあげていた。





みみし、と筋肉と骨がきしむ音がした。  
「くあ…!」  
さおりが小さく悲鳴を上げる。



「さおりセンセ! どうしたの? 締めがゆるくなったわよ!」



「あ ああ、あひ! あ あ」  
「ん、うん! うん!」  
ふたりの女教師のうめき声が入り交じる。  
「ん、ううん!」  
締めつけられながらも、相手の胴体をぎゅっと抱きすくめるさおり。  
「くああ!」  
うめき声をあげながら、歯を食いしばって相手の胴体に巻きつけた脚で、その腰を締めつけるきらら。

相手の力が弱まった…  
と思うと、すぐさま一層の力で締めつけてくる。  
そのたびに、どちらかが小さくうめき声を上げ、どちらかが悲鳴を上げる。  
申し合わせたように交互に、やがて同時に絞り上げては、ふたりの悲鳴と泣き声が響き渡った。  
いつ果てるともわからない、締め合い勝負が続いていた。



「ん…!」「あ、いや(だめ…!)」  
きららがうめき声を上げた。



「どお? きらら…せんせ!  
平静を装いながら、絞り出すようなさおりの声がかえりこえる。  
「うああ〜!」  
さおりは、きららの両腕を抱え込むようにして、きららのカラダを抱きしめていた。  
「スペシャルよ! 腕ごと、ベアハッグ!」

「うぜ ああ〜!」  
口からよだれを流し、悲鳴を上げるきらら。  
さおりの胴体から、その凶悪な脚がついにゆっくりとほどけていく。



「あう アウ! アヒイ…」  
上下に揺さぶられ、泣き叫ぶさらら。  
「ギブアップ…しないわよね?  
それとも、もう許して欲しい?」  
抱え上げ、ゆっさゆっさと相手の揺さぶ  
りながら尋ねるさおり先生。

「うあ あ…あ、もうやめ…  
…オオ… のー!」  
泣きながら、絞り出すように叫ぶさらら。  
苦しい。でも…  
「いいわ ギブしたって、やめてあげない  
もの …ん」  
ミシミシ メキ  
「あー——!」  
汗と涙、よだれをまき散らして悶え苦し  
むさらら先生。  
「おちる前に、はずしてあ、げ、る!」  
そういうと、さおりは両腕をほどいた。  
さららの肉体がぐちゃっと崩れ落ちた。



「んん〜… んー!」くもった女の悲鳴が上がる。



「さあさららせんせ…さららちゃん!  
こんなのはどうかな?」

「ママの、おっぱいですよ」  
さおりは勝ち誇っていた。  
正面から自分の豊満な乳房に相手の  
顔を押しつけ、そのまま抱きしめる。  
フロントヘッドロック  
そしてプレストスムーザー。  
身動きとれず、苦しげにきららが脚を  
ばたつかせる。



くいくいと、お腹も押しつけてくるさおり。



「もうおしまい？  
もっとやろうよ〜！」  
さおりは、相手の顔を抱え  
込んだままぐりぐりと左右  
にゆさぶった。  
「きらちゃん！ もうおう  
ちにかえりまぢゅかあ？」



「あひ…ひ…」  
なすずべなく、もてあそ  
ばれるきらら。  
呼吸を封じられ、ほとん  
ど失神寸前だった。

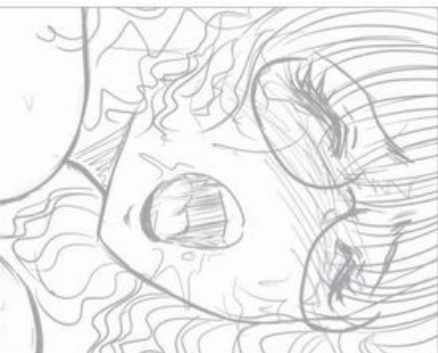


「んん〜… んん…」  
だんだん、きららの動きが鈍く  
なっていく。

十分に抱きしめ、まさに飽きる  
まで相手の肉体をもてあそぶ  
と、さおりは、おもちゃに飽きた  
子どものようにきららから胸  
をほどいた。

「次は、もう一度後ろから抱っ  
こね」

自分に嗜虐性、いわゆるサド  
の気質は自覚していない。むしろ、それは貪欲な肉欲に近い  
衝動だった。

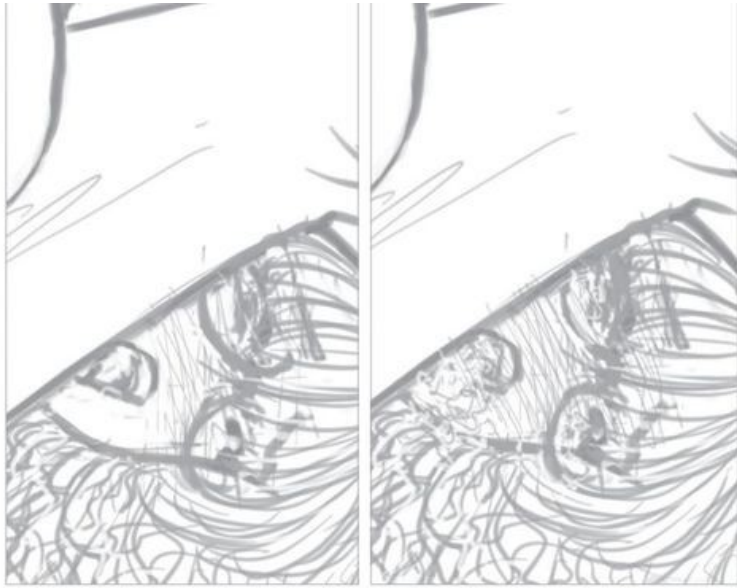


「ぎゃあー！ あー ああー！  
さおりの悲鳴が響く。



「えい、えい、えい！」  
さおりをからめ取り、痛めつけるきらら。  
両肩を絞上げ、両太ももに挟み込んださおりの顔を  
これでもかと食うくらい締めつける。  
太ももの間の、ごろんとしたさおりの顔の締め心地が  
たまらない。  
「さおりさん、こうなったら、ほんとにとことんまでや  
りましょう！ あたし、何度ねじふせられたって負け  
ません！ あなたも、何度でも仕掛けてきて下さい！  
徹底的にやりましょう！」  
女教師らしいりんとした、明るい声。

<くねじ伏せてあげます！ あなたには負けません！>  
それは、闘争心だった。  
ここまででは、自分の力と技を思いっきり味あわせたい  
だけの相手だった。  
ワザのかけあい、正面からの締め合いを通して、さら  
らも相手の女教師に対して敬意と、自分と対等の「強  
敵」という意識が芽生えていた。  
この、すごい相手に勝ちたい！  
きららは、持てる力と情熱のすべてを、絡めた手足に、  
ボディに全力で注ぎ込んだ。



「うああ〜! ああ〜」

「あひ…ひ…(ブク…)」



「おちゃいしました?」  
息を切らせながら、爽やかに尋ねるきらら。  
「死體を繰り広げている」という自覚はみじんもなかった。



くいと絞り上げるたびに、呼吸するように跳ね上がっていたきららの脚が、いくら締めつけても動かなくなっていた。小刻みにブルブル震えている。



「さおりちゃん、おねんね?」  
両肩をグリングリンと左右にふり、  
くい、くい、くいと脚に力を入れてみる。  
静かにワザを解いてみると、さおりはそのままの体勢で動かなかった。

「きゃああ〜！ 痛い！ いた〜〜い！」  
レスラーとは思えない叫び声を上げるさおり。  
必死にもがいても、どんどん脚が食い込んでどうし  
ようもない激痛が体中を走っていた。

「きらら先生はねえ、脚ではさみこむのも大好きなんだけ  
どお、こういう足と脚を絡め合うのも大好きなの。  
せっかくだから、さおり先生もつきあってもらうわね。  
（えい）」  
「きゃあー！」





「おねがい…もうやめ… やめ…で…！」  
こらえきれないように、きらが小さくうめいた。



「ん、えい、えい、えい」  
「ぎゃあー！ ああー」  
「…さおりい、あなた今なにが言った？」  
「……う… く(くす)」  
「やだ、泣いちゃったの？ ぎ、ぶ、あっ、ぶ なの？」  
「いや、ノーよ！ ノー」  
「よかったあ」



めきめき  
「あひい~~~~~！ ノー！ の~~~~つ！」 さおり先生の悲鳴がある。  
マジで、泣きが入った悲鳴だった。





「うふ、どうかしら？ 苦しい？」  
「あっ… あ…！」  
ゆっくり、相手の顔の形を味わうように締めつけていく。  
さおりには反撃したくても、もうはね返す力が残っていなかった。  
「先生、まだこんなに力残ってるんだ。さおり先生は？」  
「くい くい とお尻をゆさぶるきさら。」  
「あ……」  
こらえるのが精一杯で、言葉が出せないさおり。  
それでも、まだあきらめていないのか、こぶしは固く握りしめていた。

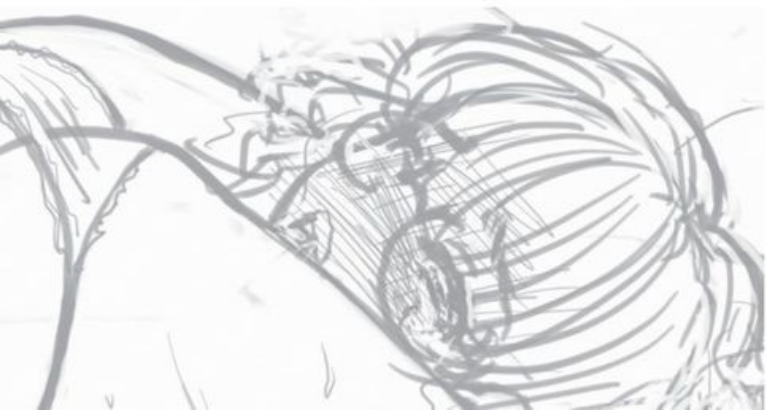




「ふあ、ああ あああ……！」



「……まあだ。もっと。もっとよ」



エビぞりになりながら力を込める  
きらら。  
思いっきりのけぞって太ももに力  
を込める。  
「ひく ひ ううん…」  
さおりのうめき声。可愛い。

「…ん…んっ」  
これでもかこれでもかと、全身を  
ふるわせて何度も何度もしめあげ  
る。  
「ひくう うあ… ひ ヒイー！」

一瞬さおりの全身に力が入り、ブルブルとふるえると、脱力する  
のが伝わってくる。



<ぎぶ… ぎうですう…>  
さおりは顔を真っ赤にし、涙にまみれ、泡を吹いていた。  
きららのふとももは、なおも断続的に締めつけてくる。



「さおりセンセ、ねちゃいました？」  
相手の顔を挟み込んだまま、きららは可愛いお尻をふた。  
「…う…あうん…」  
まだ意識があるみたいだ。  
「うふ…じゃあ…」  
再びぶるぶるときららが体をふるわせて力をこめる。



「ひっいいー ……もう…もう…やめ…で…」  
さおりの泣き声があったえた。その声は完全に戦意を喪失し、相手の女教師に許しを請うていた。  
「じゃあ、もうちょっとだけね…」  
思う存分やれる至福の時。きららは、もう少しこうして良かった。

「本気で存分にやりたい」

二人のメガネ美人教師同士のワザのかけあい、拷問ごっこは一進一退の長いワザのかけあいの末、ついに片方の美人教師…さおり先生が音を上げ、もう一方の美人教師、きらら先生が勝利をつかみ取って幕を下ろした。きらら先生が勝利をつかみ取って幕を下ろした。負けたさおり先生は、泡を吹き、完全に失神していた。



強かったわ…ほんとうに。  
あかし、こんなに熱く燃えたのはじめて。  
またやりましょうね…  
きららは、失神してケイレンしている相手に語りかけた。  
…次は、あたしがこうなっちゃうかな…  
でも、たとえそうなくても、このコとなら構わない…  
きららはもう一度味わうように、ふとももでぎゅっとさおりを挟みつけた。



きらら vs さおり：メガネっコ同士

きららとさおりの対決。ふたりはどの世界でも同じ女教師レスラーとして出会い、肌を合わせる。基本的な性格もワザも、闘い方もほとんどかわらない。しかし、必ずしも同じ結末が待っているわけではなかった。

この世界には無数の世界が存在する。平行宇宙、パラレルワールドと言われる別の世界。そしてそこでも激しいアマゾニアレスリングが繰り広げられていた。



ふたりともメガネをしていない世界



どちらかがメガネをしていない世界

## ふたりともメガネをしていない世界



きらら。東の村のチャンピオン  
96-58-99 162cm 56kg

さおり。西の村のチャンピオン  
94-62-96 158cm 61kg

アマゾン各地で名のあるレスラーは、ときどき王宮に招かれ、王女や諸侯の前で闘いを披露することがあった。東の村のチャンピオン、きらら。西の村のチャンピオン、さおり。どちらも女教師として人望も厚く、才媛にして村のレスリング大会でも優勝を重ねる強者。両者ともに締め技を得意とするが、きららはシザースを中心とした剛脚が武器。さおりは、ハグをはじめとした豪腕の持ち主。互いに相手の名は聞いていても、これまで手合わせの機会はなかったという。

ふたりは王女と同じ「パンツ一枚」の姿を許され、王女や王侯貴族達の前で闘う「御前試合」の機会を与えられた。

オンリーギブアップマッチ。それはどちらももっとも得意とする試合形式だった。そしてウワサに名高い「無敗の」チャンプとの手合わせ。それは、どちらにとっても願ってもない機会だった。

## 御前試合



# オンリーギブアップ マッチ

東の村チャンプ・剛脚のきらら  
vs  
西の村チャンプ・豪腕のさおり

大方の予想を裏切って、先に仕掛けたのはきららだった。  
素早い動きでさおりのバックにまわり、いきなり十八番の  
ボディシザースを決める。  
「くあ、ああ〜！」  
村の試合ではめったに悲鳴を上げないさおりが悲鳴を上げ  
た。

「あたしの村にも怪力自慢のコはいるよ。でも、あたしの  
脚をふりほどけるコはいないの」  
「……………」  
応えたくも言葉が出せないくらいきびしい締めだった。  
のっけの、まだ体力が十分の状態でごんなに効くなんて…！  
「オンリーギブアップマッチということだから、締め落とさ  
ないであげる。でも、少しはた、の、し、ま、せて、ねえ  
えええっ！（ざりり〜）」  
「はう〜！」  
泣きたくないのに、早くもさおりの目もとから涙が流れお  
ちる。 <あたし…泣か…泣かされている…！>  
開始早々、ほとんど初めての体験にさおりは悔しさでいっ  
ぱいだった。しかも、身をよじる動きを絶妙に読んでそれ  
を封じながら、驚くほどの力強さで締めつけてくる。

ぶるんぶるんと、ふたりの豊かな白いおっぱいが激しく揺  
れる。  
ひとりとは、途切れることなくカラダを揺さぶり、腰を上下  
に振りながら締めつける。  
片方は、激痛に耐えかねるように悲鳴を上げ、髪を振り乱  
して首を振り、逃れようとするよりも耐えかねるようにあ  
がき、悶え苦しんでいた。



長い。驚くほど長い時間技をかけ続けるきらら。  
女王や貴族の娘達でさえ、ひとつのワザにこんな  
に時間をかけることはなかった。  
「ギブする？」  
ほとんど息も切らせずに、まるでお茶に誘うよう  
に声をかける。  
「ノー！ ノオ！」  
少し泣き声になりながらも、りんとした声で拒む  
さおり。  
体を返すこともできず、ただかかボディシザースを  
はずせないなんて、初めての経験だった。

「あひ うああ〜」

まるでなにも無かったかのように、さおりがさらに組み付いた。  
吸いつくような肌、そして、まるで押しつぶされそうな力で締め上  
げるさおりの前に、きらが悲鳴を上げる。悲鳴と言うより、早く  
も泣き声になっていた。



「あんた強いじゃん！ あたしもりみったー  
はずしちゃうから！」

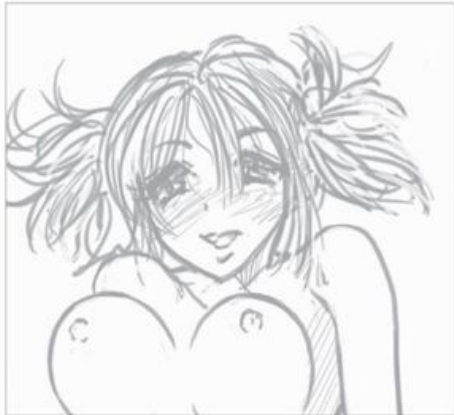
「あ、あひ———！」  
強烈な責めに、普段はめったに出さない金  
切り声をあげるきらら。

「ほらほらほら、きぶう？」  
ゆっさゆっさと揺さぶりながら、ギリギリ締  
め上げる。村のこたちだったら、もうこれ  
でギブが失神しちゃうんだけど…

「ノー！ あ〜〜！」

さおり…っていったわよね… あたしの相  
手に、選ばれてきただけあるかも…  
強烈な縛めに悲鳴を上げながらも、きらら  
は闘争心が激しく燃え上がった。





「ねえあんた、正面からのベアハッグなんて、こうなるのわかってたんじゃない？」  
平静を保っているが、すでに顔を真っ赤にしてきらが言う。  
「さすが、西の村のチャンピオンと言っただけあるのは認めるけど、東の村では力だけじゃ、チャンピオンにはなれないの。タフじゃないとね…」  
相手の胴体に巻きつけた脚に、手加減ナシで力を込める。  
「きゃああ〜 あう、あう〜！」  
「いい声ね」  
このコとは…崩れあいになる…！ 一切手加減抜きで、全力でやってやる！  
<死闘になる>…その予感に、きらはわくわくしていた。

腕力対脚力…昔っから、脚の方が腕より強いって言われてる。  
きらは、プリプリとしたお尻を振って、相手の胴体をしごき上げた。  
「はうー」大きな乳房を思いっきりバウンドさせて、泣き叫び、苦し  
みもかく西のチャンピオンさおり。



<このコ、強い！ こんなキツイシザーズ…  
…は、はじめて！ つ、つぶされそう>  
両脇だけでなく、芯まで響いてくる。  
すぐにも気を失いそうなくらいの強烈な痛み。  
<コイツ…> 泣き叫びながらも、さおりは好敵手との  
出会いに興奮してくる自分を感じていた。



「く うああ〜！」  
きららの悲鳴は可愛い。  
苦しさと、悔しさに泣き叫び、よだれと汗  
があたりにまき散らされる。  
<あの体勢から、もういちど…しかも腕を  
とられるなんて…！>  
ぎりぎりと締め上げ、ゆさゆさと上下に揺  
さぶって責め立てるさおり。



「ウン…えええい！」「あう〜 うああ」この体勢から、なんとかふりほどこうとして身をよじるきらら。させまいとさらに締め上げていくさおり。チャンピオン同士が、互いに全力を振り絞って相手を圧倒しようとせめぎあっていた。ふたりとも顔を真っ赤にしている。こんな姿のふたりは、普段の村試合ではまず目にする事はなかった。

「うそお、ああ~~~~~!」

さおりの泣き叫ぶ声が響き渡った。

「さおりい、あんたすごいわ!」

必死の抵抗から、再び相手の胴体を自慢の太ももで挟み込み、窮地を脱すると同時に攻勢に転ずるさらら。さすがに少し息を切らせている。

「さらら…! く、あう~~~~!」

なにか言おうとするが、胸締めめの苦痛にさえぎられる。

「ほらほら、まだまだいくよ」

体をゆらし、ギリギリと相手の胴体を挟みつけ、絞り上げる。

悲鳴を上げ、ばたばたともかくさおり。

<…くやしい…!>

涙と汗に加え、口からアワがあふれ出してくる。

今まで誰にも見せたことのない醜態だった。





「ひああ、あ~~~~！」

両腕を振り回し、きらが泣き叫んでいる。

「きらああ、あんたすごいよ。あたしをこんなに追い込んでくれるなん、て！…（ぎりり）「はうう——！」

互いに、限界まで締め上げる。「責め疲れ」からの立ち廻りより、痛めつけられたダメージから復帰する相手の方がわずかに早い。また、思いつき責め立てたあとはどうしても息をついてしまう。どちらも、そのスキを狙っていた。

「だから、立ち上がれなくなるまで責めて上げる」絞り上げ、ひねりあげ、さらにしごき揺さぶる長い長い「責め」

<あ、あ…あひ…（ぎぶう）>おもわず叫びそうになったギブの声を飲み込むきらら。



「ぎゃああ、あー——！」  
さおりの豊かな肉体が苦しげに悶え、暴れていた。  
「ん…ん…」わずかに歯並みのすき間から、さららの  
気合いが漏れる。真剣、必死。  
くでも…なんか楽しい…>  
抱え込んだ相手の腕を絞り上げ、両脚は、全身のけぞ  
るようには縛めつける。  
「あひ ひいいー ヒイ〜！ (ぎぶ…)」  
「さおりん、ギブしたら？ …ん…」  
まだ、ギブしちゃうヤ！」  
いつの間にか、相手に愛称をつけている。  
「さらら…さららあ〜！」  
歯を食いしばり、何とか逃れようとして、さおりの肉体  
がなまめかしくのたうつ。  
<ギブしちゃうヤ>  
挑戦、余裕…じゃない。それは、西の王者から、東の  
王者へのエール。励ました。<激闘…>  
気を失いそうな激痛に耐えながら、さららは「次」に相  
手をどう痛めつけるかに、思いをめぐらせる。





「うぎゃあ あー」  
きららの白い大きなおっぱいが荒れ狂うように弾む。  
「きららたん、もっと大きな声で泣いて！」 ぎり、くいきい  
「うあー！」  
ワザのかけあい。泣かせ合い。  
胸間ワザを仕掛けながら、さおりもきららを友達のように呼んでいた。  
息を吸いこんでグイグイと絞り上げ、軽くジャンプしては左右に揺さぶる。  
「あう！ あきやあ うぎゃああー」 泣き叫ぶ西のチャンピオン。



「さあさおりん！ こんなワザはいかが？」  
「きゃあぁ～ やあ、や あひい～」  
髪の毛を振り乱し、あらゆる姿勢で泣き叫ぶさおり。  
頭をかきむしり、床を叩き、悶え苦しむ。  
「ノー！ のー ノー！！」  
「やだあ、まだ聞いてもないのに…。ギブアップ？ さおちゃん！」  
「ノオよー うああ、うぎゃあぁあ～」  
東のチャンプがここまで機能をさらす…  
ふと気がつく、さららは自分の乳首が勃起しているのに気がついた。  
どうやら、さおりの乳首も同じように立っているみたい。  
この悲鳴のせいかな。それとも…  
いつになく、重く貼ってきた乳房の存在感を感じながら、  
さららはゆさゆさとカラダを前後に揺さぶる。  
「あうー！ あうー！ あひいひい～！」  
（逃げられない…！ もう、もう…！）  
さおりは限界だった。



「ん！ ん！」  
「はう！ あぎゃあ！」  
がっリり締め合った足の感触が心地よい。ざりっと力を入れるたびに、悲  
鳴を上げ、バツか何かのようにのたうつ相手の肉体和悲鳴が楽しい。  
「がああ… あひ ヒイ ヒ…」  
このままかけ続けていければ、確実に相手はギブアップする。  
でも…  
さららは、この好敵手との闘いをもっと続けたかった。むしろ、もっと相  
手のワザを受けて、その上で組み伏せてやりたい…！  
さららはどうしてもその衝動を抑えられなくなった。  
ゆっくりと、完全に決まった脚のロックを外しにかかる。

「うぐ…! あぐう」  
きららが泣きながらうめき声を上げる。  
それは、ただのヘッドロックだった。  
しかし、さおりのそれはただのヘッド  
ロックではなかった。  
「あは…死ぬかと思っちゃった…」  
はずしてくれてありがとう」

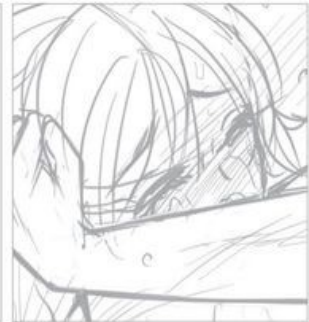
「…ひ…… ヒ……」  
さおりのそれは、抱え込んだスイカを  
一瞬で砕くという。  
<く…しんじょう…!>  
ものの数秒で、きららは意識を失いそ  
うになっていた。



さおりの腰に押しつけられたおっぱいが、ぐりんぐりんとして存在をうったえる。



「きらたん、寝ちゃダメよ(やだ…欲情しちゃった?)」  
抱え込んだまま揺さぶるさおり。相手の頭を押しつける自分の乳房も重く、抱きしめる  
たびに体中をうすくような快感が走る。



「う うっく…ううう」  
なすすべもなく、か細い声をおげるきらら。  
<苦しい…苦しい…!!> なのに…気持ちイイ…>



「うぎゃあ〜！」悲鳴を上げてもがくさおり。  
しかし、きららの太ももの間に完全にはさみつけられ、ほとんど動くことはできなかった。



さおりの腕力同様、きららの脚力は股にはさんだスイカを「ん♡」と一掃めで軽々と砕く。挟まれた娘は、たまったものではなかった。

ワザのかけあいを楽しむ二人。ゆさゆさ、ざり、ざり… 無言で締めるきらら。  
「うああ〜!」… うっく…… うう〜  
さおりのうめき声だけが聞こえる。悔しさか、痛さか、その両方のせいかわ、両の目から涙をポロポロ流している。きららも目じりに涙を浮かべていた。  
<泣きながら、闘う> 村の若いコ達はよく泣きながら闘ってるけど、…自分たちも最初の頃はよく泣きながら闘ったっけ…。股間に、さおりの熱い吐息がかかる。  
<Hしたい…>その衝動が沸き起こるたびに、その思いを打ち消すように相手の頭を締め上げる太ももに力が入る。一方さおりも、床に押しつけられた興奮した乳房のグリグリ感と、締め上げられる苦痛とに襲われていた。



さおりが少し体を起こそうとしてくる。  
「ダメよ♡」ぎゅ「あん…」  
声だけ聞いていると、まるで、レスリング初心者同士がじゃれ合っているようだった。





「うあ…ああ〜」  
手足をばたつかせて暴れるさららをねじ伏せるようにスリーパーで貫めたるさおり。互いに、相手の頭と首をターゲットにしたワザのかけあい。

「うう〜！ これでもか！」 痛い、痛い！ さおりは、欲情したカラダから意識を切り替えようと、夢中でスリーパーをしかける。しかし、さおりのカラダは無意識に相手の後頭部に乳房をグリグリ押しつけるく乳房オナニー…の快感を貪っていた。

「うああ…あう、あくう〜…」  
さららの口からアワがあふれ出す。揺れるおっぱいが、重い。



「さららん…！ ギブ…しちゃだめよ！」  
ぐりぐりと、揺さぶるように貫め立てるさおり。

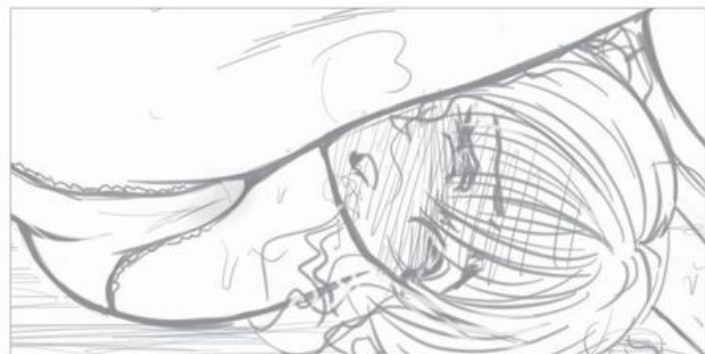


「うがあ、あひ…(わ、わかってるう…(泣))」  
さららも、さおりの肉体の微妙な変化を感じ、苦痛と別の意味で真っ赤になっていた。



「の、ノオ！ まだ、まだ…あん！」 アワをまき散らしながら泣き声でさららが叫ぶ。大きな乳房が揺れ狂い、股間があやしげにのたうつ。レスリング、ワザの苦しさにのたうつさららの肢体は、その一方で乳房と股間が何かを求めているような、妖しい艶を放っていた。

「はあ…はあ、はあ」  
再び、あるいはもう何度目か。  
さらはその美しく、野蛮な太ももの間に相手の顔をくわえ込んでいた。  
ロコツに、あそこに相手の顔をあてがうのはさすがにはばかられ、その代わり、股にはさんだ相手の顔をぎゅ、ぎゅと欲情した体にまかせて締めつける。  
まるで性行為をしているように腰をくねらせ、ぐいぐい、ゆさゆさと、夢中になって相手を締め上げているうちに、さおりのカラダが崩れ落ちた。



「さおりん？」 ゆさゆさと、脚に挟んだまま揺さぶってみる。  
「……ん…ア」  
「ごめんね、とうとう落としちゃった（笑）。よっかね、オンリーギブアップマッチでか。普通のデスマッチだったら、あっという間に決着がついちゃうか、先に何回落とした方が勝ちとか、そんな闘いになっちゃうね。こんなんでも勝っても嬉しくないし…。自分の肉欲が求めた果てだったことから目をそむけるように自分に言い聞かせていた。さらは、ぐったりしたさおりからゆっくり脚をほどいた。<なんか、自慰行為してスッキリしたあと>のような、爽やかな気分が訪れていた。





「ひ、ひい〜〜!」

お腹の底から絞り出すような悲鳴を上げるきらら。  
 息を吹き返すなり、さおりは羽交い縛めに相手をとらえていた。  
 そのまま、手加減ナシに締め上げ、絞り上げるようにきめていく。  
 <き、切り返せない……! まるで…セメントかなにかで、固められた感じ…>  
 「きららあ、ワザとじゃないのはわかってるけど、やっぱりあたし、くやしかったよ」  
 さおりは、今し方自分が落とされたことが許せなかった。<受け止めきれなかった>それは、自分のふがいなさ。  
 その一方で、自分をわずかな時間でも、完全に失神に追い込んだ相手に敬意の思いが生まれていた。  
 同時に、相手の「オナニーの道具」にされたことも、さおりは感じ取っていた。

自分の肉体も火照ったまま。相手の背中に乳房を押しつけ、決めながら自然を誘って乳首を突き立てる。  
 <あたしを落とすほどの相手。これほど、倒し甲斐のある相手はいない>。  
 自分と同じように醜いながら欲情した相手。これほど、ギブを奪いたいと思う相手に巡り会えたことが嬉しくってたまらなかった。  
 「くう、うう〜!」必死に抵抗するきらら。  
 背中に突き立てられた相手の乳首が熱く、硬く何かを訴えてくる。  
 <ああ… ヤダ…やっぱりさおりも…>

「ギブする? それとも落ちる?」  
 このコ、もっと痛めつけたい!。すでにほとんど全開の力をさらに振り絞る。  
 「ひい〜〜!」  
 きららの悲鳴の語尾に、喘咽が混じる。  
 <やだ…なんか悲鳴を聞いてるだけで、じんじん来ちゃう…>  
 股間がうずき、押しつけた乳房までもが破裂しそうに張ってくる。ともすると肉体の快感に溺れそうになる自分を、「えい、えい!」と相手を痛めつけることで紛らわそうとするさおり。

「ひいん… ひ…あひい…」  
 うめき声に合わせて、体を押しつけて責めるさおり。それは、まさにメスを犯す動きだった。

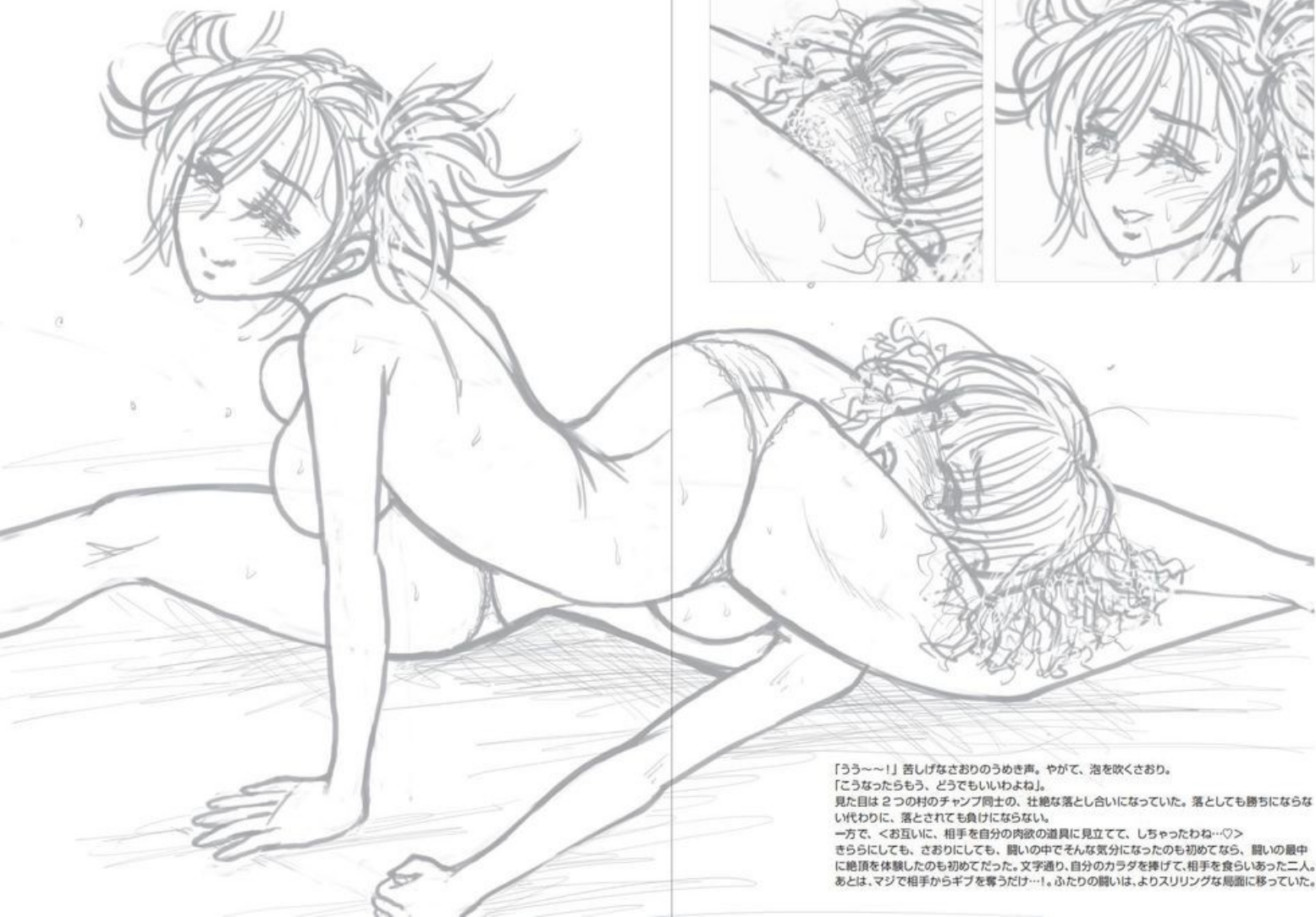




「あ、ごめん…ね」  
それは羽交い締めから、ス  
リーパーにガッキと入った  
瞬間だった。きららのカラ  
ダが、がくっと崩れ落ちた。



「ごめんねきららあ。やっぱりこのワザダメみたい <うっかりおとしちゃった… >」  
カラダを密着させたまま首に巻きつけた腕で、もう一度ゆっくり「ぎゅっ」としてみる。狂おしいような快感とともに、  
さおりの肉体をぶるるっという震えが襲った。それはマスターベーションでイッた時と同じ快感。  
「絶頂」だった。  
「はあ、はあ、事故よ、事故！ きららたん起きて！」 満たされたような思いを味わいながら、きららを揺さぶる。



「うう〜！」苦しげなさおりのうめき声。やがて、泡を吹くさおり。  
「こうなったらもう、どうでもいいわよね。」  
見た目は2つの村のチャンプ同士の、壮絶な落とし合いになっていた。落とす方も勝ちにならない代わりに、落とされても負けにならない。  
一方で、<お互いに、相手を自分の肉欲の道具に見立てて、しちゃったわね…♡>  
さらさらにしても、さおりにしても、闘いの中でそんな気分になったのも初めてなら、闘いの最中に絶頂を体験したのも初めてだった。文字通り、自分のカラダを捧げて、相手を食らいあった二人。あとは、マジで相手からギブを奪うだけ…。ふたりの闘いは、よりスリリングな局面に移っていた。

「あなたの太ももと、あたしの腕。どっちがマジヤバイか、勝負よ」  
どちらからともなく、正面から相手に絡みつくふたり。  
おっぱいと股間が、再びうすいていた。  
互いの肉体を密着させ、それぞれの乳房が熱く、重くふくらんでくる。股間を中心に、お腹が、カラダがどうしようもなく熱くほてってくる。  
「泣かせてやる！」  
二人は同時に凄まじい力で相手を絞り上げた。



「きらたん、締め落としちゃってイイ？」  
「さおりん、あなたこそまた、落ちちゃうんじゃない？」  
互いに不安な心で、荒れ狂う肉欲の衝動を押し隠して、一瞬笑顔で言葉を交わす。



「く。う~~~~！」  
「んあ… んん~~~~！」  
痛い、苦しい。そして、気持ちいい。それは、狂おしいほどの充実感に近かったかもしれない。二人の苦悶の悲鳴は、本人達も自分ではじめて聞くようなエロチックな声だった。



汗まみれになったカラダが、互いに吸いつき合うように密着し、そして互いに激しく押しつけ合うようにうごめいている。<お互いに、求め合ってる…> 激しい闘ぎ合いの中に、言葉には出さなくても、二人は相手の思いが完全に伝わっていた。



「さあ、さおりん！ どう？ どうだ！」  
「あー！ ああ〜」 さおりに泣きが入った。



「く…さあああ〜！」今度は絞り出すような悲鳴がきららから上がる。こりこりとしごくように絞り上げ、くいくいと揺さぶって責めるさおり。  
「ほら、ぎぶあっぷ？ きらら、ギブアップ？」  
「ん！ のおー！ あひい〜」  
のけぞり悶え苦しみながらも、さおりの胴体に巻きつけた脚はほどかない。首を激しく左右に振り、泣き叫びながらも締めつけてくる。  
「きゃあ きゃあ！ あう〜」「くああ アウ ああ〜」  
ふたりの悲鳴が交互に上がり、やがてふたりチャンプの悲鳴が混ざり合う。ざりざり、ゆざゆざ こりこり ざしざし 肉と骨がさしむ指がする。  
「くう〜！ この！ この！」「まだまだああ…あ…あ…」  
いつのまにか二人の気持ちは相手を倒すことに、闘争心の虜になっていた。

互いの肉体をしこきあい、責め合うふたり。歯を食いしばって締め上げては、締めつけられる。必死にこらえては、締め返す。互いに相手の豊富な肉体を食らい合うような、終わりのない、果てしない責め合いを続けるきららとさおり。  
「アオオ！ あお アオオ〜」  
「くふう ひ〜ひつ あふ、あふう〜」  
ふたりの悲鳴とうめき声は飽っほく色を帯び、もうほとんどセックスの時と同じような響きを帯びていた。

「ひ〜ひい〜…」  
限界が訪れたのか、さおりがこらえかねたように切ない悲鳴を上げる。しかし、相手も同様だった。  
「ああ〜！ も もダメ！ ああ〜」  
きららが首を上げた。しかし、それでもまだ脚で相手の胴体を締めつけるのはやめない。

「う〜 ウン ウン！」  
「アウ、あう あう」  
ふたりとも涙を流し、口からアワをまき散らしながら、それでもまだ、相手より先にやめようとはしなかった。だが、少しずつ、きららの両脚がほどけていく。

大きくのけぞったきららが涙にあふれた目を大きく見開き、大きく開けた口が、ばくばくと動く。  
「もう…もう…」  
ふたりはほとんど同時にワザを解き、同じように崩れ落ちた。



足首を絡め、太ももを少し脚を開いては閉じ、閉じては上下にしごくようにしてさおりの胴体を絞り上げる。悲鳴を上げながら、さおりもぐくと、相手の背中に回した両腕に、渾身の力をこめる。おっぱいを押しつけて締め上げるさおり。そして、きららは股間を押しつけるようにしてざりざりと挟みつけてくる。誰が見ても、さおりが負けそうに見えた。





「あ…… いや…」



無言で、口を大きく開けて責め立てるさおり。ブルブルとお尻や体が震えている。さおりの肉体にも、限界は訪れていた。



「うぎ… く…… うう～」



「さあ、いくよ。覚悟なさい…」  
くちびるをなめ、さおりがささやいた。



脚を大きく開かされるきらら。パンツがしっかり食い込んで、あらわになった股間が、あえくように妖しくひくついている。



「ああー！ や やめ… あ～あ～あ～！」  
白い乳房を揺らせて、きららが悲鳴を上げる。



【あー あー ああ〜ん】  
泣き声になったきららの悲鳴が響き渡った。  
「……ギブ？ それとも失神？ それとも…？」  
きららの肉体を抱きしめながらさおりが言った。  
「ギブアップしちゃう？ もっと、やる？」  
くいくいと、きららのカラダを二つ折りに締め上げながら、横に揺さぶる。

【まいった？ もうギブしちゃう？】  
ズンズンと、こんどは少し上に持ち上げるようにしては下ろし、さらに締めつけながらひねりを加える。  
【ひしい〜〜〜】 <だめ… もう… …もう… >  
相手が氣を失いそうな氣配を感じると、くいくいと揺さぶって氣を失うことも許さない。涙を流し、お尻を握りながら相手の娘、西の村のチャンプを責め続けるさおり。  
きららの興奮しきったたわな乳房がぶるんぶるとゆれ、それは疲れ切ったさおりを興奮させ、挑発するように思えた。

【はあ、はあ、はあ、どおお?! きらたん ぎ、ぶ、あっぷ?】  
【あー… あふ あふ… ひく … ああ〜ん】  
【泣いちゃったの? きららチャンプ!】 ゆさゆさぐりぐり  
【……あ… あ… かひ いひ… うええ〜ん!】  
言葉にならない悲鳴が、切なげなうめき声と泣き声になった。

【えい! んん〜… えい、えい!】  
苦しげに息をつきながらも、なお時間を続けるさおり。

<おねがい…もうや… もうやめて……>  
死闘の末、ついにきららの心が折れた。



涙とよだれ、そして泡を吹いたきらの口から、  
小さな懇願のような声が漏れた。

「ぎぶう... ギブアップラ...」



西の村のチャンプ、きららと東の村のチャンプ、さおり。  
お互いに何度も相手を失神させ、泣かせあう激闘の末、  
心が折れたのは西の村、凶悪な太ももを武器にしたきららだった。  
長い、恐しい死闘の果てに「強敵」からギブを奪ったさおり。  
あふれ出す勝利の快感の一方で、<次もまた、このコに勝てるとは限らない…>でも、この相手とは…きららとは、またやりたい。！>  
死力を尽くし、自分の全力を出し切って闘える相手との出会いが、今は何より嬉しかった。  
<それに闘いながら…> さおりは、まだ火照っている乳房と股間にそっと手をあてた。  
さおりの豊富な肉体は、激闘の疲れより、勝利とは別の満足感と喜びに満たされていた。  
<村に帰る前に、もう一度…、きららも、ぜったいやりたいはず…>  
乳首を勃起させて倒れているきららを見下ろして、さおりの口もとが笑みを浮かべた。

なお、二人のスリングを破壊を飲んで見守った女王をはじめ王族貴族からは、二人には相応の褒美が与えられ、パンツ姿での競技許可、及び翌年も再びここで闘いを繰り広げるよう要請された。

## きららがメガネっ娘の世界



きらら、理系教師。  
96-58-99 162cm 56kg

さおり、文系教師。  
94-62-96 158cm 61kg

アマゾンのある旅館。そこでは泊まり込みで、各地域の教師が集まる研修会が行われていた。「さおさお？」ふと声をかけられて振り向くと、見覚えのあるツインテールにメガネの女性がニコニコしてこっちを見ている。初対面のはずだけど…なんか面影を思い出すものがある。「…！ きららちゃん？」

小さい頃、いつもとっくみあいをやっていた。けっこう本気で、毎日どちらかが泣くまで遊んでいた相手。プロレスごっこ、デスマッチごっこ、おとなたちの試合を本気でマネして、病院に担ぎ込まれることも幾度となくあった。「泣いたら終わり」ルールも、いつしか「大泣きしたら、許してあげる」になり、いつもなかなか決着がつかなかった。ある日、遠くに引越すことになり、離ればなれになる前の日には二人ともたちあがれなくまで闘って…。(そう、最後だからってパンツを賭けて戦って、結局交換したんだっけ…)

15～6年ぶりの再会だった。

「…研修会のあと、久しぶりにどお？」お茶を誘うようにきららが言った。

さお「いいわね。昔みたいに、泣いたらはずしてあげるね」

きら「ギブって言ってもはずしてあげ、る。 ………ね、どっかが動けなくまでやらない？」

さお「ほんと？ 楽しい！ 決闘ね。じゃあ…(パンツ賭けてやる?)」

きら「さおさおからそれ言い出すなんて…あの時、あたしが提案したら最初、いやがってたのに」

さお「イヤ？」

きら「まさかー！ 望むところ♡ じゃあ、今夜ね。」「うん」

その夜、旅館の離れを借りて、浴衣姿の二人が向かい合う。見つめ合い、ゆっくり帯をほどく。薄暗い中、パンツ一枚、見事なカラダの妙齡の女性が、互いをいとおしむようまなざしを立てていた。<よく育ってる> 互いに、ブルブル震えるみことな乳房と、あまやかに盛り上がった股間を見つめ、そして目が合った。闘う前から興奮しているのか、二人ともわずかに頬を紅潮させ、目を潤ませていた。<ん！> 息もびったりのタイミングで、2つのグラマラスな肉体が互いを貫き合うようにひとつになった。



## 幼馴染み in 深夜の旅館

# 女教師パンツはぎ 決闘デスマッチ

「あ、ああ、ああ〜」  
「どうしたのさおさおお！ もう泣いちゃったの？」  
開始早々サイドからのボディシザースで相手をとらえ、  
そのまま締め上げてもう10分以上がたっていた。  
頬を紅潮させ、心地よい汗を感じながらきらが言う。  
「ギブって言ったらずしてあげる♡」  
「ノー！ ノオヨー！」  
さおりはすでに涙を流し、口から泡を吹いていた。  
返せない！ これまでもいろんな相手とやってきたけど、こ  
んなに強烈なボディシザースの使い手はいなかった。  
<あいかわらず…！>  
子どもの頃も、何度も逃げられなくて泣かされた。  
「くああ、ああ〜！」  
悲鳴を上げながら、首を思い出すさおり。



「ほら、ほら！ えいえい！」  
大きな乳房を揺らせて、リズムカルに締めつける  
きらが。時々、締めつけたまま腰を振ってやる。  
十数年ぶりの再会。きらは股にはさみこんだ相手の  
肉体を思う存分味わっていた。。  
「あうー！ ああ〜〜！」  
泣き叫ぶだけ、されるがままのさおり。  
首を振り、床をバンバン叩き、文字通り悶え苦しむ  
23才の女教師。その彼女を痛めつけているのも、  
同じ23才の女教師、しかも、幼馴染みの友達だった。  
ふたりの決闘は、まだ始まったばかりだ。

「あひい〜 うぎゃあ〜！  
逃げられるようにわざと力をゆるめ、体を起こしたところをオーソドックスなバックからの胴締めに移行する。  
ぐい、ざり ざり ざり  
「きゃあ くああ〜！ きらら、きららあ！」  
髪を振り乱し、おっぱいを激しく揺らして叫ぶさおり。  
「ほらほら、どうしたのさおさお！」  
軽く息を弾ませて、楽しそうにきららが声をかける。  
腰を上下に勢いよく激しく動かして、さおりの胴体を絞り上げ、締めつける。貴めているきららの乳房も、貴められているさおりに負けないうらい揺れ回っていた。

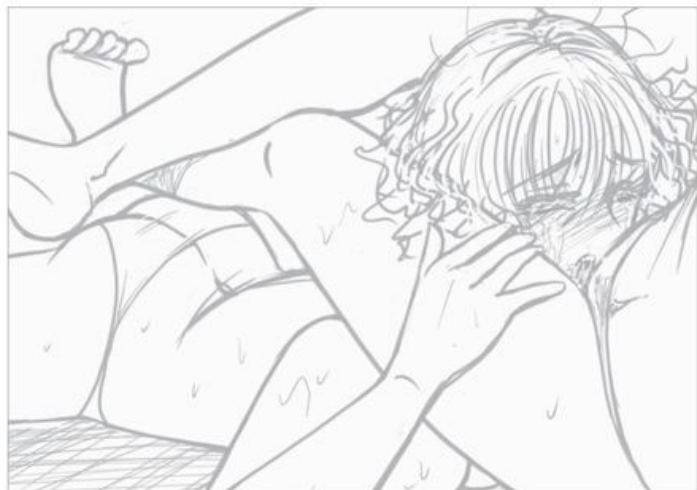
そう、こうやって何度も何度も…  
さおさおの口から、「ギブーっ」というのを聞くのが嬉しくて、…勝ってもへとへとで、立てないこともよくあったよね…  
いとおしむように、締め続けるきらら。



<ほんとに、オナナの体になっちゃって…！>  
柔らかく、それでいてくねり強く抵抗するさおりのボディを、ねじふせるように締め上げながら、心地よい充実感を味わうきらら。



「くああ〜 まだまだあつっつ！」  
さおりが自らに負合いを入れるように叫ぶ。見かけ以上に声は幼く、かわいらしかった。その分、肉体とのギャップが異様にエロかった。



「うう〜… この…この…」  
抵抗し、身を起こそうとするたびに締め上げ、動きを封じるきらら。  
「ん、ん！」ズンズンと腰を前に突き出し、ぎゅうっと締めつけてやる。  
「うう〜…… うあ、ああー！」  
涙声になってさおりが悲鳴を上げるたびに、股間に熱い息が当たる。  
責める方も責められる方も、お互いに相手の熱い肌の熱と肉感を味わっていた。  
はあ、はあという息づかいが、薄暗い部屋に響いていた。



「さおさお、しぶとい…！ それでこそ、さおさおだけど！」きららも顔に似合わないロリ声だ。  
ふるふるっと、りきみでカラダをふるわせながらきららがつぶやく。  
一方的に責めていても、全然気が抜けない。  
でも、その緊張感も、なんか嬉しくてたまらない。  
ゆさゆさと、舟をこくように責め立てるきらら。

マシュマロみたいに柔らかく、それでいてしなやかなハガネのように締めつけてくる太もも。ふっくらした下腹部。一方的にやられていても、相手の肉体をたしかめるように味わうさおり。床に押しつけられた乳房が張りつめてくる。（やだ…感じて来ちゃった…）

「アウ… あうう！〜」  
<さおさおのうめき声で…色っほい…> 気がつくとも股間がうずいている。だんだん、おっぱいも興奮してきていた。  
<醜いながら、あたしったら何考えてるの？> 自分の肉体に対してとまどうきらら。頬が熱く紅潮してくる。

「だきしめ！」  
 きららのしなやかな肉体を思いつき抱き締め、嬉しそうに上下に揺る。  
 「きゃあぁ〜 きゃあ、きゃあ！ アウ〜！」  
 首だったら、先にわざをかけた方が勝ちみたいところがあつた。今は違う。でも、抱きさまでやっつける！ 微笑みながらさおりは目じりに涙を溜めていた。

この体勢で、抵抗してくるきらら。胸の中で、力強くくねるきららの肉体を、ねじ伏せるように強く抱き締める。  
 「ほう、ほう あ、あ〜！」 甘く切ないきららのうめき声♡ そう、この声…興奮しちゃう!!! 子どもの頃と同じ。でも、今はもっと…  
 さおりは、身体の底からわき上がってくる思いをこめて、思いつききららのカラダを抱き締めた。  
 「ほうらうら〜！」



「さおさおお… く、苦しい…！」  
 涙声でうったえるきらら。涙をポロポロ流している。  
 「ゲマアミロ」笑顔で、いたずらっぽく可愛い声で応えるさおり。  
 「きらら、ギブう？」  
 「ノー！ のお、あう〜！」  
 このやりとりも楽しい。  
 <互いに痛めつけ合う>  
 幼馴染みで、お互いに相手のことが十分すぎるほどわかってる。互いに認めあってるからこそ、手加減しない。



ゆっさ ゆっさ 「あおう、アウ！ あおお…」子どもの頃には出なかつたうめき声を上げるきらら。  
 <お互い、もうすっかりオトナね> さおりは大好きなおもちゃを抱き締めるように一層力を込める。  
 「ほうらん〜…」うめき、悲鳴を上げるたびに もっとと痛い…それも、昔とまったく同じだった。





「あ、あ———！」  
みっともない大股開きになって、さおりが悲鳴を上げる。  
「さおさお、ギブアップ？」  
絞り上げながら幼馴染みの声がある。  
「ギブアップかって、聞いているの？」 ぎし  
「うがあ ぎ… の、ノー！」  
思わず、ギブと言いかけるほど、完全に決まっていた。



「ふ！ うん！ ウン！」  
「あう、あくう！ あひ！」  
薄暗い一室に、二人の声が響く。

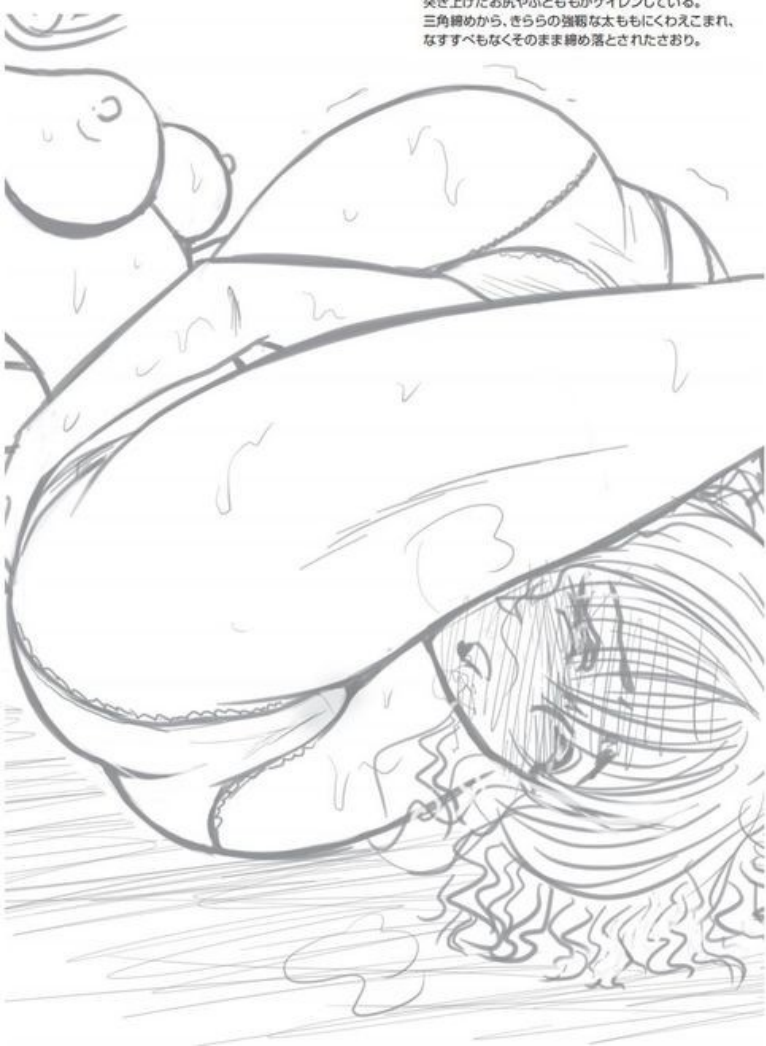
得意な技で思う存分相手を痛めつける。  
それは、子どもの頃から変わってない。  
しかし、組んだ相手の肉体は、昔より  
はるかに気持ちいい。



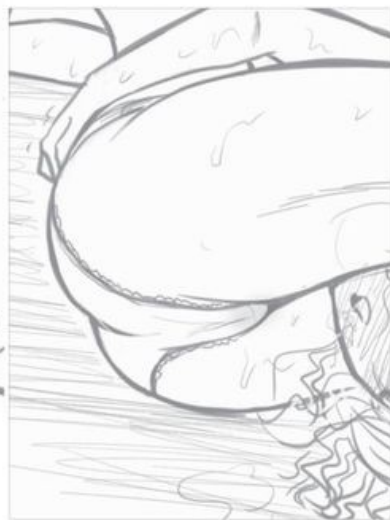
イヤらしいカラダしてる…  
さおりののたつ乳房や、股  
間から目が離せない。  
あたしもカラダには自信あっ  
たけど、さおさおもこんなに  
実ってるなんて…。  
少し悔しい…かも。

「そ、だ、ち、す、ぎ！」  
「うぎゃあ、ああ〜」  
痛そうな悲鳴だけど…かわい  
い声…てか、…イイ声♡  
のたつカラダとうめき声を  
聞いていると、なんか体が熱  
くなってきた。いつの間にか  
ほっぺたも燃えるように暑い。  
高揚感とは別の意味で、さら  
らはすっかり頬を紅潮させて  
いた。  
「さらら…ん… もう…」  
さおりのか細い声がする。  
「効くでしょ〜」 ぎぎゅ  
「うあひー！」  
さおりの白い脚がばたばたと  
震れるさまは、見ていて飽き  
なかった。

「ぎぶ… ぎぶ…」  
さおりはうわごとのように繰り返していた。  
突き上げたお尻やふとももがケインしている。  
三角締めから、さららの強靭な太ももにくわえこまれ、  
なすすべもなくそのまま締め落とされたさおり。



「やっちゃった…」  
夢中になると、いつもこう…。  
そう思いながら、さららの気分は晴れ晴れとしていた。  
やっぱ、「さおさお」とはこうでなくっちゃ…。



「ねえ、起きて〜」  
相手の頭を太ももの間に挟んだまま、ゆさぶつてやる。  
「う…」  
「起きなさいってば！」ぎゅう〜  
「うああ！」  
激痛に、さおりは意識を取り戻した。



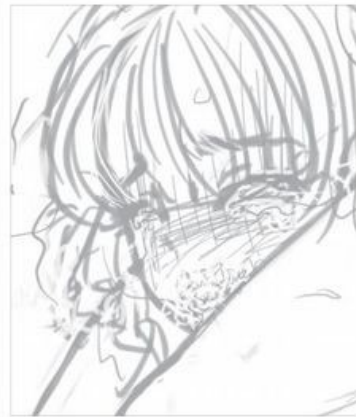


「きらちゃん…あ。」  
「ギブアップするう?」



しなやかに体勢を移行し、続けてヘッドサザースを仕掛けるきらら。  
「それぞれ、さおさお、がんばってよ」  
動けなくなった相手に、なおも得意技を仕掛けていく。これも、子どもの頃からの約束だった。

「あ… あ…」  
身体を反らして、なおもぐい、ぐいっとりきむきらら。



「さおさお～、ぎぶあつぷ?」  
涙を浮かべ、口もとからよだれが糸を引いて落ちる。文字通り、全力をふりしぼって幼馴染みを痛めつけている。  
「…きら…ちゃん」  
幼馴染みは泡を吹いてまた、失神寸前だった。下腹部に感じるさおりの乳房の弾力とコリコリした乳首が心地よい。  
やだな、さおさおってば…わきまえないカラダだね♡  
(…あたしと同じなんだから…♡)



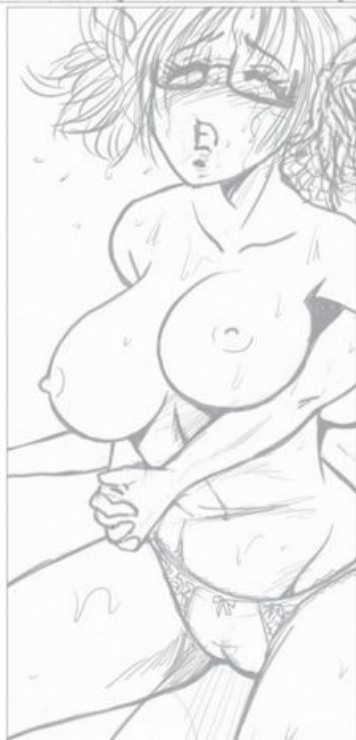
「あう、のお、のおー」  
乙女の可愛い声在必死にノーを連呼する。



はち切れそうな大きなおっぱいを揺らして、舌しもみがくきらをとらえ、ぎりぎり締め上げるさおり。



「やだーさあお、乳首、背中刺さってるー」  
小さな声で、必死にうったえるきらら。  
「きららだって、おっぱい…硬くなってるよ」  
おっぱいをつかむ代わりに、ぎゅっとその胸体をカキ締めつける。  
「はうウン！」  
きらのロリ声があえき声を上げる。



「きららん、ギブ？ ギブアップですかあ？」  
揺さぶりながら、いたずらっっぽくさおりが尋ねた。疲れか興奮のためか、たいぶ呼吸が荒くなっている。



めりっと、肉がきしむ音がした。  
「きゃああ〜！ ぎ..」  
口をばくばくさせ、  
「ノーー！」  
振り絞るようにきらが叫ぶ。



「きゃああ、いたい、あ——！」  
悲鳴を上げるきらら。  
何とか振りほどこうとなりふり横わす暴れる内  
体を、強引にかため、縛り上げるさおり。  
密着したカラダがもっと相手を求めるように、  
激しく抱き締めていく



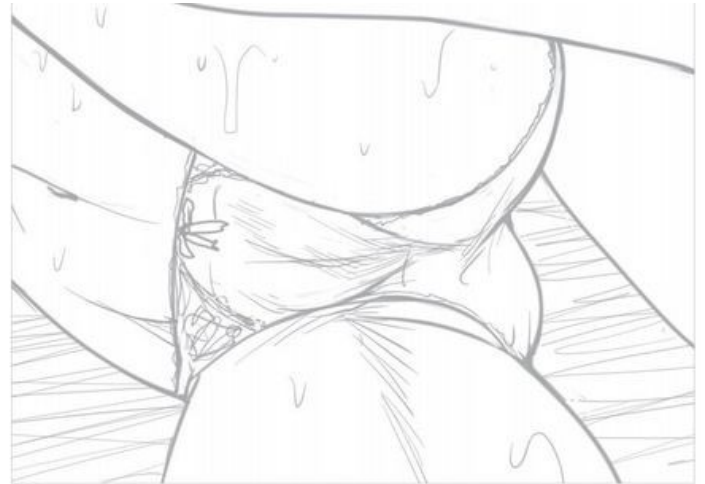
「きららちゃん、またギブかなあ？」  
「やあ、ノー！ きゃひいん..！」  
首を振るようにして、拒むきらら。



「さおさお～、きょうもひい  
ひいひいさせてあげる」

「きららちゃん、きょうは、  
おおなきさせちゃうから」

<ヒイヒイ言わせてあげる>  
縛り上げながら、さおりは誰  
のふたりを思い出していた。



「く、うう、くうん…！」きららの涙声が聞こえる。



「きららあ、あそこにパンツ食い込んだじゃった  
ね。薊れ目ちゃんのスジがくっきりしちゃって…  
気持ちイイ？ このパンツ、あたしが貰うね」  
舌なめずりをしながら、挑発するさおり。  
「わた…さ…ない…もん」  
それを言うのが精一杯だ。このフザさえしのざ  
きれば…！ この体勢からの反撃に向けて、泣  
きながら必死に耐えるきらら。





「どちらかが動けるまでよね」

涙を浮かべ、相手のカラダに抱きついていくさおり。きららも、正面からさおりのボディに両脚を絡めた。

<「ざい」で「しよ」！>  
子どもの頃は<ざい>の意味も知らず、この体勢でただお互いどちらかが泣きを入れるまで締めつけあった。ふたりとも、相手に勝った記憶よりも許してって泣き叫んだ記憶しかない。自然と、二人の表情が険しくなる。

<座位>

大人になったカラダでの今、互いの豊富な、文字通りわがままなカラダを密着させると、これから闘いを始める二人の心に、<セックス勝負>の文字が浮かんだ。相手のカラダに回した腕が、絡めた脚が、おなかの感触が、舌応もなくHな気分させる。



「うあ、ああ〜！」  
さおりが髪を振り乱して泣き叫ぶ。  
「うん、えい、えい！」盲然と相手のボディを締め上げるきらら。  
「やっぱり、あたしの勝ちね！」  
カラダを揺すって、きららが言った。

「さおさお、いくよ！」  
「きららん、いくよあ〜！」  
同時に相手に声をかけるふたり。



「ん、ん」「ん、…く…っ」  
互いに相手を全力で締め上げる。静かな、しかし熱い闘いは、やはり互角だった。  
「き…ら…らあ、あぐ…く…」「さおさお…お、んん〜」  
互いに身をよじり、せめぎあうふたりのなまめかしいうめき声があがる。互角のまま、ずいぶん長い時間がたった。

「うきゃあ、きゃあー」きららの悲鳴が上がる。  
両腕を抱き込んだのベアハッグ。  
「ウン... うん!」 「あう、あうー!」  
まさかあの体勢から...!  
苦しげに身をよじり、悶えるきらら



「ん...のお! のお!」  
苦しみのあまり、きらら  
が叫ぶ。  
なんとか振りほどこうと  
身をよじるが、さおりの  
両腕はきららを完全に  
ホールドし、絶対ほどけ  
そうになかった。



「きららあ、ぎ・ぶ?」  
「あ あひ ...ノー!」  
いくらギブが解禁状態とは言え、そ  
う何度も言えるものではなかった。

「じゃあ、ゆるして、あげない!」  
相手を抱きかかえたまま、小さく  
びよびよんとジャンプする。  
「あう! アウー!」  
きららのロリ声が苦しげに悲鳴を  
上げる。  
「おねがい...ゆるして...もうやめて...  
え!」 「いやん!」 「あう~!」  
淫靡な拷問ごっこが続いていた。





「あひ、あひ、あひいいい き きららああ！」  
舌しげに身をよじり、悶えるさおり。豊富な乳房がバウンドし、汗が舞った。



自分も乳房を大きく揺らせながら、苦しげにあえく相手を見つめるきらら。  
「もう、ギブ？ なんて聞いてあげない…>  
半狂乱になって悶えまくる幼馴染みの姿を、潤んだ瞳で見つめて責め立てる。  
「なんか…思う存分、犯しまくってる気分…>きららは舌なめずりをした。

「あう、あう、あうー！ もう、もうやめ…  
きららあ、あたしもう…！」  
激痛にあえぎ、泣き叫ぶさおり。乳房が重くぶるんぶると震れ、  
痛いの、乳首は硬く、コリコリに勃起していた。  
のげろるたびに乳首がしげれ走り、身体の奥がうずく。

やだ…こんなの…  
痛いの、苦しいのに、  
カラダが震んでるみたいに…

「ん！」  
胸体に巻きついた脚が、  
そのカラダをしごくように動き、  
締めつけ、絞り上げる。

「はう〜！」  
さおりのカラダが  
ひときわ大きくのけぞった。



「ひ… ひい…」 さおりの泣き声が響く。  
「まだ、まだだめ…」  
否しそうにもかく豊満な肉体を  
もうひとつの豊満な肉体がねじふせている。

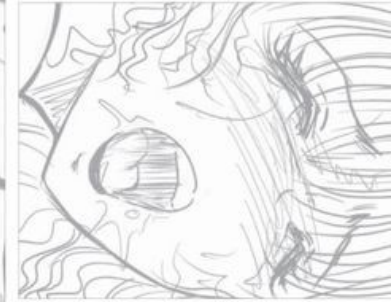
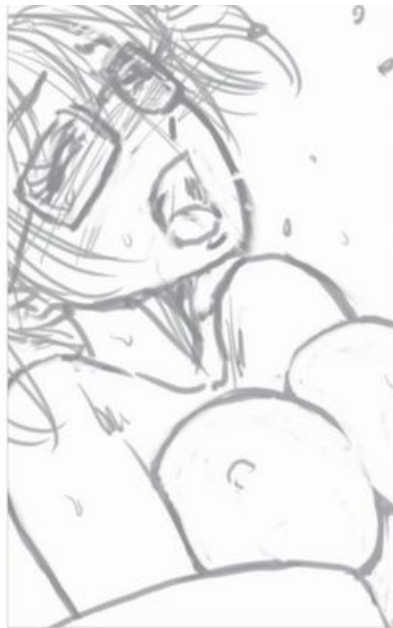


「あ…あ…」  
身動きできない。腕は完全に押められ、頭はきららの  
太ももがはさみこんでいた。  
しかもこれって… <後背位の…>  
いやいやをするように思わず脚をばたつかせるが、  
何の役にも立たなかった。

9

「さおさお！ いっくよ〜！」  
「うぎゃあああ〜 やあ、やだあ〜！」  
速い動きでざしざしと責め、少しずつゆっくりした動きに  
なってくる。  
前後に体をゆらすようにしながら、ロックした両腕を絞り  
あげ、くいくいと左右にひねる。そして頭を挟み込んだ  
太ももがぐい、ぐいと締めつけてくる。  
きららの動きは、まるで欲しがってたまらない女がよがっ  
ているようだった

「あひ〜〜！ ひい ヒイ…」  
普通の…背問技のキメ方と違う…  
悲痛を上げながら、さおりは幼馴染みの動きに自慰を感じ  
取った。  
オカズに…道具にされてる…(泣)  
でも、どうすることもできなかった。



「ウン…ウン…」  
「あ、あ、あ…」  
必死にこらえるさおり。絞り上げられる  
たびに片足が上がり、絞り出すように  
色っぽいうめき声が漏れる。

「ん、ん！ えい… んん〜  
…さおさお… さおさお！」  
ロリ声が、相手の名を何度も呼ぶ。きら  
らの責めは激しさを増していた。

「ひ…ヒイ きら きらちゃんもう…  
もうやめ…お願い ひい〜！」

もう…ゆるして…これいじょうあたし…

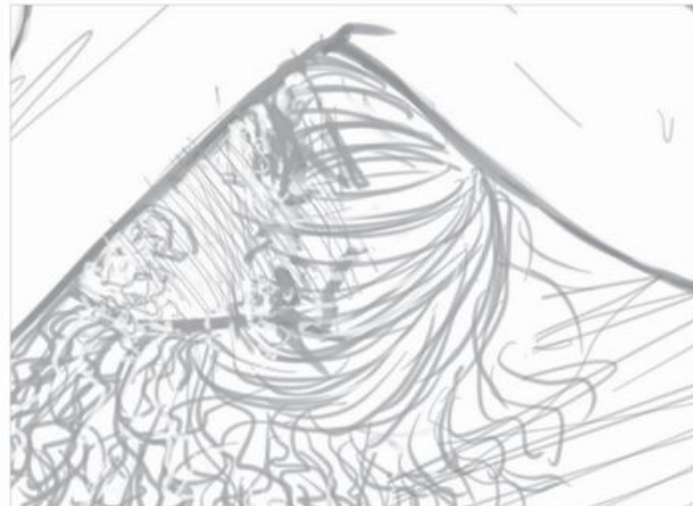
子どもの頃のビジョンが頭をよぎる。  
「ちゅ…」



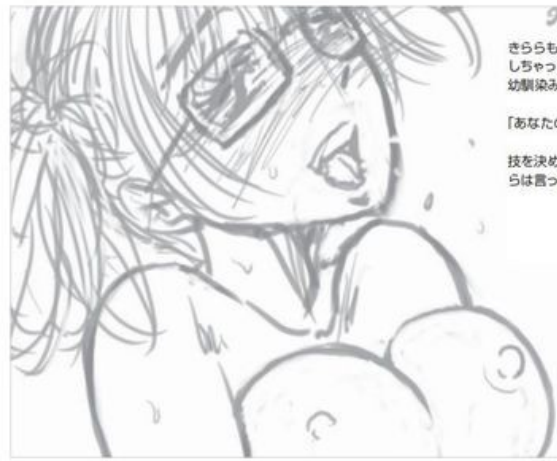
戦意喪失、というより、負けを認めたさおりのカラダから力が抜け、くじやんとした。



「さおさお、大丈夫？ まだやれる？」  
息を弾ませ、確かめるように相手を揺さぶって問いかけるさらら。



「…もう、無理みたいね…」 遠くでさららの声が聞こえる。さおりは、身も心もギブアップだった。顔を真っ赤にし、白い泡を吹いている。



さららも顔を真っ赤に染めていた。しちゃったあとみたいに、自分も幼馴染みも体中が火照っている。  
「あなたのパンツ、買ったよ♡…」  
技を決めたまま、小さな声でさららは言った。



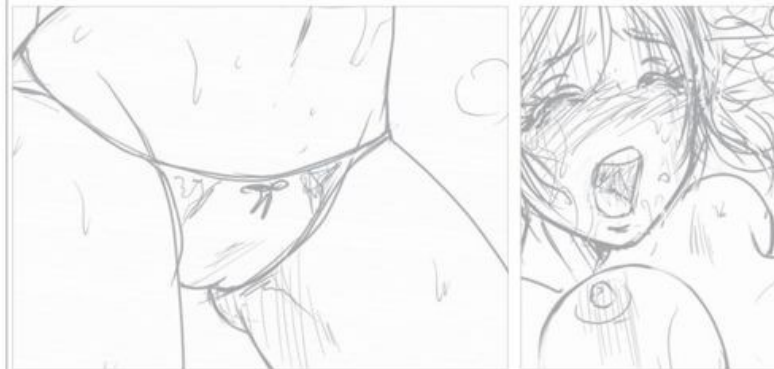
素早い動きでバックにまわり、いきなりアームロックで責め立てます、さおりさん!

「うぎ…ぐ… あー!」

きららさん、こらえましたがたまたま悲鳴を上げます! けっこう可愛い声です。あのカラダでロリ声です!

「うふ… あなたって見かけもだけど、いじめたくなる声してるのね。すこそこそられる」

メガネの女教師、さおり先生が早速挑発にかかります。しかし口だけでなく、相手の腕を抱え込んでの絞り上げ方からみて、相当の場数を踏んだ実力がうかがえますう!



「あう! うぎゃあー」  
きららさんの悲鳴に合わせ  
て大きなおっぱいが苦し  
そうに大暴れ! 単調な上  
下の動きだけでなく、変  
則的に斜めや回転する  
ようにのたうちまます。  
これは責めているさおり  
さんが、ただ腕を絞り上  
げるだけじゃなくて、い  
ろいろな方向に揺さぶ  
っているせい!  
この、おっぱいがぶん  
回されるのって精神的  
にもけっこう来ます。  
なまじ、もみほくされ  
るより嬉しいものあり  
ます。

「あう! ああー! アウッ!」  
長い軌跡な拷問わざの  
前にきららさん、す  
でに泣きながら悲鳴  
を上げている



しなやかな動きで相手の女教師をヘッドシザーズにとらえたかと思うと、圧倒的な太ももパワーでさおりさんを蹂躪！何とか逃れようと抵抗したさおりさんですが、その豪腕を持ってしても逃られず、とうとうきららさんの太ももの間で失神です！手足やお尻がふるえていますね。又字通り相手の太ももに屈し、ねじ伏せられた格好！きららさんにしても先ほどのお返しというところか、顔を赤らめて満足げな笑みを浮かべています。

相手をゆりおこすように、ゆっくり脚に挟んだままさおりさんを揺さぶっています、きらら先生！股にはさんだ頭をぐりぐりするって、けっこう気持ちいいものがあります。目を覚ますと、すごく悔しいですし。

一つ一つのワザを楽しんでかかっています女教師！ワザのかけあいを楽しむ二人の対戦は、片方が失神しても陰惨なムードにはなりません。さあきららさん、次は何を見せてくれるのか？ それともさおりさんが再び攻めに回るか？

<はあ、はあ、はあ…>  
二人の動きが止まりました。肌と肌、肉と肉をみっちり  
密着させた体制のまま、ハアハアと息をつきながら、小  
休止か、互いに何が言葉を交わしているようです。  
どうやら、相手を完全に認め合った様子  
せえの、で締め合いましょう！ とでもなったのが、  
二人とも大きく息を吸いこんだ！



【あう~~~~~!!】  
きららさん、大きいのけそって絶  
叫お！ 正面からの力比べ、締め  
合い勝負はさおりさんに軍配が上  
がった様子う  
のけそり、もたえる相手をなおも  
締め続けるさおり先生！

【ああ、ああ、や、やめ…!】  
【だめ、まだまだ】  
【あひい〜〜!】  
壮絶！ そしてエロティックな闘  
いを繰り広げるふたり！

相手が失神しておもらしするまで  
負め合うのがこの失禁デスマッ  
チ！ 勝負がつくまで、何度でも  
相手を失神させる闘いです。  
そのかわり失神させられた方は、  
放尿をこらえられさえすれば、何  
度でもしきりなおせます！

ずっと劣勢でも逆転勝利がある一  
方、一方的に負めさいなまれたあ  
げく失禁で果てることもあり、通  
常のギブアップマッチ以上に屈辱  
を伴うこの闘い！

【おう… おう！ あお〜】  
きららさん悶絶寸前！  
さおりさん、このまま相手を締め  
落とせるか〜？

「うきゃあ、ひいいー!」



「あう〜 あう、あうらう〜ッ」  
一転して今度は悲鳴を上げるさおりさん!  
相手の胴体から腕もほどいてしま  
まい、再び一方的に負められる側!  
きらさん、<相手が強いほど、燃え  
るの> といわんばかりに、負めなが  
ら舌なめずりしています。

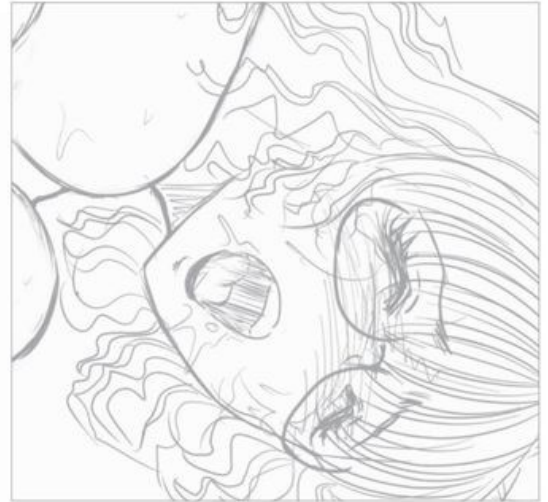


何とか振りほどきたいさおりさん! ですが、ゆっさゆっさとカラダ  
とおっぱいをゆさぶって締めつけるきらら〜! <りんぐりんぐと胴体  
を締めつけるたびにさおりさんの豊満なおっぱいも大きくパウンド  
〜! 苦しむ様子が実に淫らですさおり先生! 一方の負めるきらら  
先生はその姿が嬉しくてたまらない様子! まさに肉弾、これでもか  
と相手の肉体を徹底的に痛めつけあうふたりの女教師〜!



ほとんど動きの止まった相手に追い打ちを掛けるきらら～！  
同じ失神させるのでも、失神寸前まで追いつめて、失神させないようしながら、イタイワザ、苦しいワザをたまたみかけていくプランですね  
まるで舟をこくように前後にカラダをゆする動きで締め上げ、さまざまな角度から絞り上げています！ さらに揺さぶり、絞り上げる！ さおり先生、これはたまらない！

同い年、同じ教職、初対面！  
どれをとっても、お互いに負けるわけにはいかない、負けたくない条件がそろっています！  
まさに全力で相手をつぶしにかかるとはきららさん！  
受け止められるかさおりさん～！



「ああ～ ノー！ ノー！」  
メガネの女教師、たまらず泣き叫ぶ～！  
徹底的に責め立てられていますさおり先生！

「さあ、ほら！ …ん、んん～！」  
「うぎゃああ あ あう、あーあ～！」  
ちょっと動きを止めては再び再開するきらら。  
通常ならワザを解いて別のワザに移行するタイミングをもう何度も超えて同じワザをかけ続け、責め立てる！ これは責める方もかなり苦しい！  
しかしワザを解きません、きららさん！

「あひ あ あっ あ…」  
さおり先生のかわいいうめき声がだんだん小さくなっていきます！ この体勢での失神放尿だけは避けたいところ～！



「いやあ〜、あー！」

失神からの「しきりなおし」を制したさおり！  
相手を徹底的に責め続けると、どうしても次の  
展開に対応しきれないものがあります！  
ウケ勝負の様相も強くなってきたふたりの試  
合、今度はさおりさんがきららさんをとらえ、  
攻勢に転じています。

「あう、あう…あ、あ…」

きららさんの口からアウがあふれ出しました！  
しかし当然こんなものではいっこうに許す気配  
がありません。



「くひ… ひ… ひ……」

抵抗し、なんだかね返そうとしているきらら先生で  
すが、どうしてもエスケープさせてもらえない！

「ぎゅ… ギブ…」

くちもとが小さくギブって動きました！

でも外してもらえない！ はずしませんさおり！

きららさんこのまま失神か〜？ この体勢で放尿すると  
それこそ……それは絶対避けたいきらら〜！

「あひ、あひ、アひ…」

捕らえた相手をぐりぐり揺さぶって責め立てるさおり！ この  
体勢になってからももう、かなりの時間が経過しています！  
まさに相手が失神するまで離さないつもりです。  
さおり、この失神合戦を楽しんでいます！

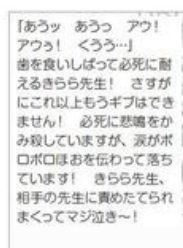




「はう〜！ あう〜！」  
ロリ声が苦しげに悲鳴を上げる〜！  
相手の失神を確かめることもなく、後  
ろから抱きすくめるさおり！ ふたた  
びヘアハグでの持問にかか〜！



「くろう ああ〜！」  
きららのかわいい声が悲鳴を上げます！  
きらら先生の股間ももう、パンツが騎込  
んで割れ目がくっきり！  
そしてのたつたわわな乳房！  
自分も見事な肉体を持っていても、思わ  
ずジェラシー、そして、いじめたくなる  
カラダです。今度はさおり先生が責めな  
がら笑顔！ 締めつけてはゆるめ、ゆる  
めては締め上げてく〜い上下に揺さぶ  
りかける！



「あうっ あうっ アウ！  
アウ！ くろう…」  
歯を食いしばって必死に耐  
えるきらら先生！ さすが  
にこれ以上もうギブはでき  
ません！ 必死に悲鳴をか  
み殺していますが、涙がホ  
ロボロほおを伝って落ち  
ています！ きらら先生、  
相手の先生に責められて  
まくってマジ泣き〜！

【ああ ああ〜〜〜】

【さおりさん、ぎぶしてもいいわよ はずしてあげるから】

ふたたびきららさんの攻勢!

このワザはもう、単純にもものすごく痛い、ギブアップ狙いのワザ、  
無論相手のスタミナを奪う意味では十分効果的ですが、  
それにしてここでこのワザを繰り出すとは...

【あ—— うああ〜〜〜】

泣き叫ぶさおり! 文字通りの拷問ワザに悶絶寸前!

【ギブ! ギブアップ! ギブします!】

ああー、ここでさおりがあっけなくギブアップ!  
ですがきらら、なかなかはずしません! 笑顔浮かべてなおも  
相手がもがき苦しむ姿を楽しんでいます。



激闘の中、二人とも乳首が立っています! 闘いで疲れてくると、相手の声を聞いているうちにカラダが反応してしまうことはよくありますが…。その分、闘いの方もますます激しく、ヒートアップすることもここ闘技場では日常茶飯事!

【うぎゃあー あ———! ああ〜〜〜】

さおりがもうすっかり泣き声になりました! さおり先生もマジ泣き! ようやく満足したのか、きらら先生がゆっくり足をほどきます。

互いに相手をマジ泣きさせる女教師対女教師のこの勝負、決着はどちらかが放尿、おもしろするまで! おしっこ漏らして屈辱の敗北を味わうのは果たしてさおり先生か、それともきらら先生か〜!

「うーくあ ああん！」  
わざわざ正面から相手の顔をはさみこんでの屈辱ヘッドシザーズ、  
相手が身を起こそうとするたびに締めつけて抑えつけるきららー！

「うーー！」  
「ん、ン」  
「あうー あうう！」  
さおりさん、どうしてものがれられません！

おっぱいをゆらし、腰を前後にふるきらら先生！  
これはもう、されている方はすごく苦しい上にとても悔しいワザ！  
さおり先生、なんとかワザから逃れようともがいていますが、  
対するきらら先生、メガネ美人をがっちりとらえてにがしません！

「あう あう あううー……！」  
きらら先生のうめき声がかすかになってきました。もがいている手足  
がだんだん動きがゆっくりになって……もうほとんど動きがなくなりま  
した。これはもう、落ちるのは時間の問題！

さおりさんのカラダに震えが走る～！  
ぐったりしているさおり～！  
さおり先生失神！ 相手の股に顔を埋めるようにして屈辱の失神です！  
きららさん音教なし！ 締め落とした体勢のまま、相手の失神を確かめる  
ようにまだぐいぐい締めつけています  
さおり先生はもう3度目の失神！





失神した相手をもう一度ふとももでとらえるきらら先生!  
相手の顔をしめつけて、お尻を揺さぶって責める～!  
「うあ…あ」  
そして相手がふっと意識を取り戻すたびに、すぐさま、体をふるわせて締め上げる!  
「あひ!」 小さな悲鳴を上げてさおりさおりさん失神～!  
きららさん、同じようにそれを何度も繰り返すぞ!  
「うああ…」 「んん!」 「ひ…」  
意識を取り戻しては落とされるさおり～!

3回…4回…5回…6回…  
これはたまらない! さおり先生、全身をケイレンさせてついに完全に失神～。しかしまだ! まだおしっこはこらえている～! こらえていますさおり先生!!  
何度失神させられても心はまだ折れていません  
ここでワザを解くきらら先生～!  
そのまま横に倒れ込んで大の字! さすがに限界だ～!

さおりさんも意識を失ったまま～! まだ全身がケイレンしています。仕舞な死闘! このままダブルKOで終わってしまうのか、女教師同士の失禁デスマッチ!

きららさん、仰向けに横たわったまま苦しそうにあえいでいます! まさに全力をふりしぼって責めたてましたが一歩及ばず! きららさんとしてはたたみかけたいところですがまだ動けない!  
一方さおりさんが少しずつ意識を取り戻してきている様子!

のろのろと二人が体を起こして互いの肉体に照準を合わせる～!  
さあ仕掛けるのはどっち～?～?



「いや、ああ〜」  
きらさんが悲鳴をあげる！  
ダブルKOの状態から仕掛けたのはさおりさんの方がわずかに早かったー！  
もうろうとしながら、同じく疲労困憊でもうろうとしている相手をスリーパーにとらえてそのまま締め上げるう。

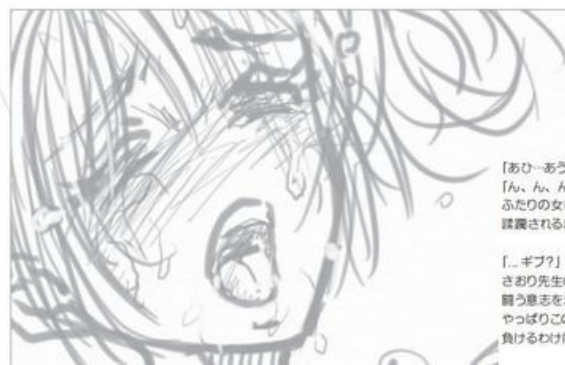
「ふああ、ああ〜！」  
手足をみっともなくばたつかせ、悲鳴を上げるきらら〜  
みるみる顔が真っ赤に染まり、あつという間に泡を吹いたお！  
泣きながら締め上げるさおりが笑みになる！  
くいくいとひねりあげ、貴め立てるさおり先生！



「ああん あう あう あうう〜」  
きらさんの悲鳴はもうほとんど泣き声！  
口リ声の泣き声はそそります！  
これは闘いではいささか不利！  
きららの泣き声にさおり先生、驚い立たされるように貴め立てる！  
もがく脚の動きがだんだん緩慢になってきた〜！



「あー ああ、ああ〜」  
続けてさおりさん、ぐったりした相手女教師を正面から  
抱え上げて締めるう！ べアハグ！ 徹底にお返し  
〜！ さっきのように力こばさみに入りたいきらさん  
…ですがもう、ほとんど脚が上がらません！



「あひーあう あうーあん あん！」  
「ん、ん、んんん んっ…んん〜！」  
ふたりの女教師のうめき声が響いています！  
蹂躞されるきら先生〜！

「…ギブ？」 「……ノー！」  
さおり先生の挑発に対してまだ毅然と  
闘う意志を示すきら〜！  
やっぱりこの相手には負けられない、  
負けるわけには行きません！

抱き上げた体勢からストンと前に落とすようにして一気に正面から相手の顔を抱え込む〜！ フロントからのヘッドロック…それにプレストスマーザーの合わせ技！

締め上げられたあとのコレは苦しい！ しかも自分と同程度の巨乳に顔を押しつけられるのはかなり精神的にも屈辱です！

「う〜〜！ ん〜〜!!」  
相手の胴体に腕を回して脚をばたつかせるきらら！  
逃れようと必死ですがさおりさん、笑みを浮かべて逃がしません！  
あそこまで自分にギブを叫ばせ、失神に追い込んだ強敵！  
自分も限界以上に徹底的に相手をいたぶることに夢中になります！



「あ、…あ… あ… ……ぎぶ… ぎぶう〜！」  
ここできららさんからギブアップ宣言！ さおりの豊富な乳房にはばまれながら、ギブアップの声が漏れました〜



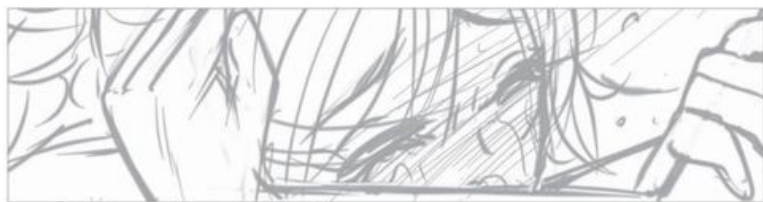
「だめよ..!」  
さおりさん、は穿しておげません！ なおもいたぶるさおり先生！  
さっきまでもがいていたきららの脚の動きが完全に止まりました。  
時々ゲインが走る！ 股間がひくひくしていますが、きらら先生、無意識にまだこらえています！



今度はヘッドロック！ ここにきてさおりさん、ヘッドロックで相手を貴め立てる！ きららさん、もうほとんど動けないー！

「ひいいい… あひいいいん」  
すすり泣きのようなうめきが漏れている！  
振りほどこうともがいていますが、ほとんど全く身動きできない！ さおり先生、仁王立ちでがっちり相手をホールド、そしてえいえいと力強く締めつける！ 女教師同士の闘い！ 相手をとらえ、締め上げるのはメガネ美人教師！  
とらえられ、貴めたてられるのも美人教師！

ほとんど互角の肉体、そして闘いを繰り広げてきたふたり、ここからきららさんの逆転劇が見たいものですが…！ きらら先生、もう動きが止まっているう



「や…やめ ……もう、…あ…あん…」  
顔を真っ赤に染めてうめくきらら！ 涙をボロボロ流しています！

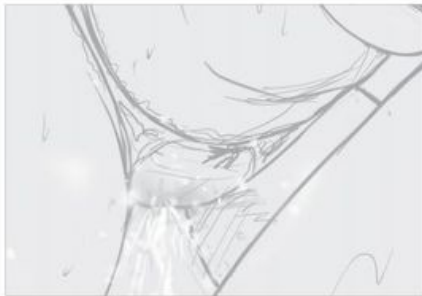


地下闘技場一期一会、本日の試合は以上で終了です。また、明日のご来場をお待ちしております。

なお明日のスペシャルイベントはアルディメットデスマッチ2、急所攻撃アリのルールです。参加希望一名の場合、本日実況担当のわたくしがお相手いたします。

皆様のご参加をお待ちしております。明日も楽しい1日にいたしましょう！

本日はどうもありがとうございました。~~~~！



地下闘技場で出会った二人、さおりときらら。「おしっこ濡らしたら負け」。それ以外、ギブと失神は何度でもOKという過酷な失禁デスマッチに挑んだ二人は、偶然にも同じ年、そして同じ教職団士の対戦となった。互いの得意技を繰り出し、情け容赦なく、しかし善々として互いの肉体を締めつけ合うふたり。互いにギブを奪い、失神させあう激しい闘いの果て、互いに力尽き、立ったままの放尿姿をさらして敗北したのはきららだった。

地下闘技場一期一会。文字通りの「一期一会」の闘いの機会を提供する一方で、ここは「出会いの場」でもあった。闘いの相性しだいで、後日、互いの家や宿、施設などで再戦するものも多いという。このふたり、さおりときららの闘いの物語も、始まったばかりなのかもしれない。



萌えレス22

女教師 肉弾レスリング  
死闘メガネっ娘

2019.10 PDF発行  
© Meto